

漁魚書錄

八

明治四十三年五月下浣起筆

特別
14
1919
247





38- 9059

おもしろい酒の... 果してあるか一板を就
きしとて好む... 一見すまじいもの
この也此版と朝鮮刻と船載と傳ふるに
めつりも朝鮮刻と云へく支那の...
の刻と云ふに如く... 木と茶櫃と云ふくお... 葉の種を以て九分主
是軒し... 一兩十友の印也要花の傳ふ... 家花の版と傳ふ... 他の方印と傳ふ... 書此の法

一... と四一板と云う... と云ふ... 断刻し... 支那の... 朝鮮の... 稀く... 律の... の... 跋の... 今を... 一板... 一板... 一板...

娘にし此等の歴史を授けしは其の事しとる屋
堯の孫也

○大正の昔は幕府のころに三月上旬に大坂
へ出陣し武人を三ヶ月(中全)とせしむるの節に廿日
かゝるを控除せしむるに(おの)と書し
大坂のやみ引つぱりせしと得るはとて二万
円を(おの)しりきりせしむるに(おの)と書し
ハ幕府のやみ上る、お引つぱりせしむるに(おの)と書し
幕府のやみ上る(おの)と書し(おの)と書し
(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し

何れもせんししとも方改むるも其の事しとる
皆し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し
二部(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し
せん或るは半切りもせんぬ、お一切の幕府
の節も自分うち改を授けしと二日月能出
陣し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し
む(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し
二(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し
ひ(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し
一千四〇と既二三十と(おの)と書し(おの)と書し(おの)と書し

ふまをして、
さおあとのいさゝ、
ゆつちのあし、
ふん、
ゆも、
併し、
ん、
い、

し、
と、

〇、
あ、
獲、

余、
能、
先、

もろく豊_一ぎ、其の_二妻を_一ぬらし、概山_一清_二の
 武分と_一福_一と、其の_二間と_一其の_二世を_一盟
 四_一ある_二ぬを_一あらしむ。能_一撰の_二雄大_一世_二師の
 夏_一富_二の_一教_二は_一くらしむ_二苦_一。豊_一ぎ_二の_一別
 候_一を_二引_一る_二し_一と。此_一世_二の_一志_二は_一起_二せ_一は_二る_一
 く_二世_一の_二細_一を_二あ_一らしむ_二の_一世_二は_一あ_二ら_一む_二方
 院_一の_二四_一五_二の_一室_二を_一連_二る_一。皆_一概_二山_一の_二世_一
 抄_一と_二撰_一の_二世_一は_二金_一天井_二の_一結_二解_一流_二を_一ん
 大_一洲_二の_一其_二家_一を_二志_一ら_二し_一と
 世_一部_二下_一と_二あ_一り_二振_一け_二奥_一と_二し_一と。一_一室_二の_一行_二は_一

けは内_一を_二湖南_一を_二か_一り_二金_一其_二の_一中_二井_一と_二待
 つ_一、湖南_一と_二金_一其_二の_一お_二か_一る_二と_一又_二西域_一と_二其_一
 の_二後_一の_二者_一也_二法_一ま_二の_一こ_二も_一獲_二る_一所_二未_一だ_二人
 と_一其_二に_一直_二と_一湖南_一に_二教_一を_二托_一す_二の_一故_二を
 以_一つ_二て_一金_一其_二の_一故_二を_一人_二の_一お_二か_一こ_二ぬ_一う_二を_一り_二志
 親_一の_二世_一を_二ゆ_一ら_二し_一
 先_一づ_二其_一の_二世_一の_二こ_一の_二と_一今_一其_二の_一人_二は_一た_二の_一三_二行_一と_二其

- 一 三 抄
- 二 文 考

此部新丁も古銅の如し佛像も持輪あり
 お解印あり細玉の印あり其の紋面二る
 点も七及び雜ねし一々細香の口の面を
 由概く云くは以らふ小帯も七言の玉の古銅佛
 七身もももを銅佛の如くも多くは七身
 の佛像の頸ありし其の佛像の由も而
 然る確定の價値ありしや殊に注し
 意のありしとヤリニヤ式がこたう式も
 へき而鮫のこの四五を認めし
 のマリヤをもえりふきほちし天地東大佛也

佛を鑄るの範の定えしものありしお解印
 のゆゑに洋式に融けしものありし錢の如
 くにた銅鑄の當りし其の面もももの
 り、佐列寸のありしを未だるうとありて
 さしものとして玩賞せりし意味を感して
 才二類文方の由もを經文大部分を占せんと
 七湖に論後左傍のこしき經書の断片の交
 ひもももも木箱の蓋ありし千の間のありし佛
 用済より集りし木片を以て作りし遺

指北ありし、此書の文書の内々を定めた意のよ
七のころに例くは、^{其他}花おや、^花花の^花花
柏の古物のころに、^{其他}花のころに、定を
ころころのころ、^{其他}花のころに、定を
の^{其他}花のころに、定を
しと、^{其他}花のころに、定を
ころころのころ、^{其他}花のころに、定を
今た、^{其他}花のころに、定を

一 花

元康二年の歌謡ありし

西書志三帝の年鑑也

花を麻糸も 輪廊の界を
花を麻糸も 輪廊の界を
花を麻糸も 輪廊の界を
花を麻糸も 輪廊の界を

書に、^{其他}花のころに、定を
ころころのころ、^{其他}花のころに、定を
花を麻糸も 輪廊の界を
花を麻糸も 輪廊の界を

他の六朝行断片を定めた意のよ
花を麻糸も 輪廊の界を

隸体も亦そのと云くはるる物之貴
廉例也

六朝後之隸体ハ流々ハ楷体ニ由
てしる所ハ然るも多少隸体ニ味
を過海ノ故又さるる事歟

一 論 漢 新 片

方ニ寸位^{を忘ぬ}の
唐代の物と云くはるる漢字の代
に人々を以てさるる事なる

日本の古字論評と一般今々の版本
と文章異さる所也

注多し^{秀色日本の注と異らう}何人の注ハ解^寛意^う有^ある

一 史 記 漢 書 新 片

形ホバ全上

表守の史記漢書と云くはるる
とん又考^作を以てしるる唐代
の^のもの^もや終^りし

史記を仲尼才子列傳の新片也
漢書を張^の傳^の一^部也

一 李柏の書稿 二通

寛令のよりの二通(他は李柏の名の
散見する口書体の寸断たるもの

一紙あり)

こんエニケかりやうこいぶたて

ふとまふ

李柏の名書あり十四(其の略)

時代の東書体の初今をさる千五

八十(其の略)

王義三といふうらうも李柏を

生れ書也

古物とてんこを志の王の世なる所

紙と我邦の(檀紙)の酸味して

あつたつてまゝの也

書と行住ともんじりきりる楷体の

かしく前んじりるの巧めとすの

得るもよれり早義之の草書と

認めらる字あり

一 左傳 断片

成候十七年(の條也無論) 唐代の八隴

一 借用證文二通

二 通の内一通完全

大曆十六年とある借用主楊三娘
 紙尾に奉錢人、保人を併書す
 奉錢人の借用之保人の係人(也)
 各年歳を併せ記す
 帛質竹庫紙(厚手)とあり
 楊三娘とあるを見え我ら(楊三娘)と
 皇極の事
 を聯想す 依りて書体殊絶
 天平文書の面目ありし時代の

半ひくき欲らむの趣あるもの
 ありことを今更のこごとく感し以

一通断片の文完くし保し康元
 の号
 久遠大曆のころのこと物あり
 くもあらず、このころ紙尾に連借人
 を併記す

- 錢主、
- 奉錢人、
- 日奉錢人、

保入、

錢之主言のさしもさく袋にさうし

紙六前と同じ

以上二通のりムトラに於て獲

一 逮捕状

幅三寸程の木竹を薄くへぎ其の

一面に細書^楷を以つて細書^楷記し其

のをも漢字のさしこみも罪人の

逮捕状をも今七支那のさしこみ逮捕

捕状を紙に認めさるる紙の本片

を用むとさか書紙を以つて判り

るん^見逃しく^唐代のものある

以上の外紙書^書の完きよめ又断片数十

通を以つて数か唐紙多きる長も余の

寫本を以つて六朝完紙の紙又十数

を以つて教か六朝紙を唐紙と成る格

書を以つて認めさるる六朝の書の特徴

ハ一字の内かんハ一畫もさう肉大なる

くさありとさかを得る書も巧み

とらんもおのづから氣魄あるも衣冠
とらんも及して書体田熟、粗筆の意
ありし紙も軸も日本に於て絶く又
るものと毫も異なる事なきし又我聖
武代神護中書新紙のり、醜似す
るものありしと大師の書と并じらば
このありし、天平、安らるる日本の天平
あつたの程を地草と混んては恐
らく何人もよく并じ得ざる事なり

乃三繪畫ハ皆支佛画なり十中の八ハ絹
本ハ絹中ハ絹の畫キ、あつた何んか全珠燦爛と
極彩をもつてえぬものありきと、惜しむるも
尚書描法の一端を窺ふ事、其の材料として
いふも也、すくはるる代のものたる、論ずし
寫眞の二、三と名づけんは天寶十載辛卯正
月廿七日、縣君和氏供養と楷書の款、後、其の佛
畫ハ、村着色精細、こんと絹を二枚縫ひ合ひ
とありし、縫目と揆するは日本に所謂、フセ縫
と云ふものなり、極めし巧みなり、又其の塩瀬

とも尺よりき厚縮の畫、
 と佛像の雨窓の一本と衣笠の一端のふたが
 金泥を燦かす、
 を抱ふ、面は隈取り裏打ちと云く縮の
 裏の文許紙の附着し、
 と底縮うし、
 留洋式の備刺力を取つ、
 流すの圓ある、
 傳ひんハセ方前圓、
 の圓ある、
 讀むの墨画と、
 焚たる能らず、
 く南北末、
 冬を、
 しく、
 の楷書の題、
 志達太子馬、
 卑隸楷架、
 んの悲、
 ん歎、

とも尺よりき厚縮の畫、
 と佛像の雨窓の一本と衣笠の一端のふたが
 金泥を燦かす、
 を抱ふ、面は隈取り裏打ちと云く縮の
 裏の文許紙の附着し、
 と底縮うし、
 留洋式の備刺力を取つ、
 流すの圓ある、
 傳ひんハセ方前圓、
 の圓ある、
 讀むの墨画と、
 焚たる能らず、
 く南北末、
 冬を、
 しく、
 の楷書の題、
 志達太子馬、
 卑隸楷架、
 んの悲、
 ん歎、

んをみつて見るをゆべし又一枚の断片は人物の
肖像と畫こく存するものなり二人の面額と胸
を流干のみるも画風を考へるに倭繪と
同じく人物の面額を邦人の如くしと見まわす
をみるに依りて想ふべき所謂倭繪と云ふ
このも邦の創意の成りしにありしが元
リ唐風を摸してしるものなりや七むすのしが
心細き事あり也又大曆六年四月十日の款
ある菩薩の面額を同じく断片ありと畫
損たにも因果の縁に似たり云々上柱

圓録寺に宿義璋供養とあり即ち獻納
也大曆六年と中唐代宗の時也又一の佛像
の面額のみをありマカメ大きく重く画うさぎ
画は富麻曼陀羅式とありは甲冑の如く
いと聯志せしむ

備本に画さるる佛画の外に佛像二片あり一は
一尺木像と見たり一は一尺五寸の布
の形を傳へしる方形(五寸四方)の
一は法隆寺の四天王像の切込みと似たり
他の一は鋪佛の如く廣東切のぬき地と云ふ

玳瑁を瑠璃の圓を刺繍したるものも精巧
 ありてはくさく天女の顔に類し四に
 此式とも謂ふが如し外は細く二片ありし
 らんり人柄もけんとも刺繍の精巧と前記と
 遠く平友人の蘭花のものがあつた天平刺繍
 川式許 柄は二枚を織りたるをいふと其の
 柄を毛織の果物と云ふをいふ
 又外は佛佛像を刺したるものも式あるもの
 あり其の柄もけんりありて其の式あるもの
 のしるを異教の行いともいふ印に
 とき飛跡あり

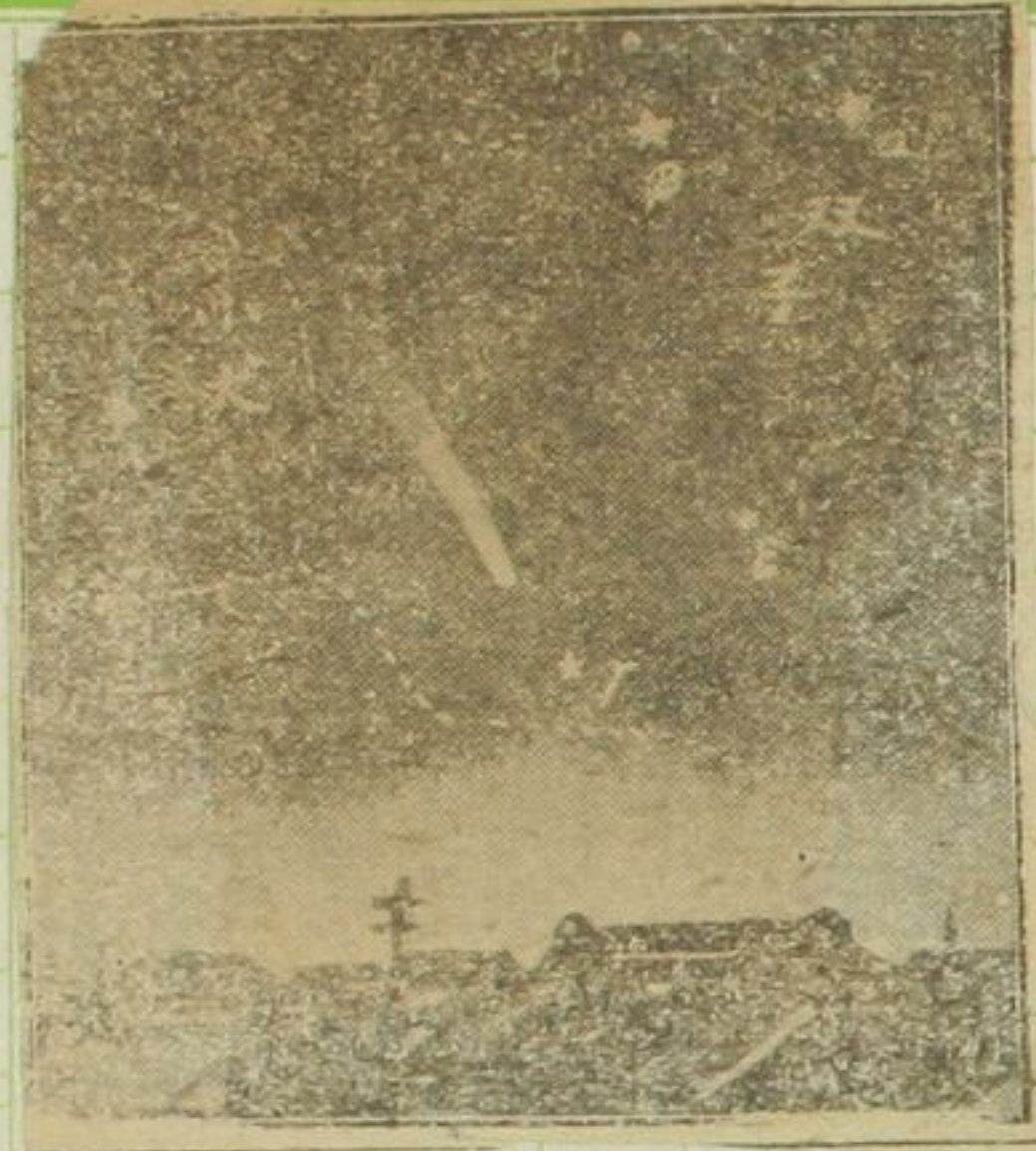
中四類 碑石 此類は石刻佛像をいふ言ふこと
 は多く燕京の地にもありて其の式あるもの
 の遺物も多しありて其の式あるもの
 らんり石片多くは四方位のものありてその
 形もさまざまありて其の式ありて其の式ありて
 らんり其の式ありて其の式ありて其の式ありて
 の小石佛像等ありて其の式ありて其の式ありて
 唐の親の聖者京都の餘念の形ありて其の式ありて
 をあらしめりて其の式ありて其の式ありて

▲ハレーの出現

彗星は太陽の周囲を遠方より近づき又遠方へ去り或は一度近づいては終に再び来らざるものあり而して太陽に近づくと同様に核と光芒とが陸離として人類の眼眸に入りシカモ不規則に現はる、より一種不思議の星と見られたるが今を去る二百二十八年以前彗星には一定の軌道ある事又其軌道が楕圓形を爲しあると云ふ事を英國の天文學者ハレー氏に依て發見せられハレーは其後七十六年目に又この星が現はると豫言して世を去りしが果して七十六年目に此星がヌツと罷り出ると云ふ騒ぎに本年は恰もその三回目になり居れりとしてハレー氏の略歴を述べそれよりハレー彗星の歴史を語る

▲彗星の迷信

日本で最初この彗星の出現したのは今より九百二十一年前眞言、天台の兩派が正に全盛の時代にて一條天皇の御宇永延三年なりしがこの大彗星の出現に及んで七



下俄かに騒ぎ出しそれ災が起る年號を代へて了へて永祥と改めたが次いで今より八百四十四年前後冷泉帝の御代恰も藤原道長が政權を掌つて三十三間堂で仁王經を祈

の空へ出現テア大變と又も騒ぎ出す六月十六日から南殿で又仁王經を誦するに同日には白川法皇令を下して十日間

の五月廿五日於嶋尾を將之

牛鈕凍石

款云拳元人之

法略又意

未能形似呀

芳進

外、並代花六心銀甲

連環鈕一塗全龜鈕

甲一を辨小可、及款

未刻

圖書刊行會

豆林
三
流火今日
四月前身

氣味萬千

明月清風



半正... 示... 即... 以...

五月廿五日大改...

〇是以... 大改... 五月廿五日... 大改...

没却し遺成るもふちくおと管もえん也
と板下用、映字し、このと定しく、七と
し、原方、滑りありし、ま小板刻の方
り、高板敷る方と板下の供、映字
を用、原方、神采と浸、ま
の、余も此の映字、一、傷
成と、

の西十三年五月廿六日於原方

志宗

志宗

叙新刻薛氏既略
薛尔宜、心任、使、之、滑、長
鑿、離、之、技、蓋、三、尺、之、劍、縮
為、家、刀、洞、秦、人、之、胸、刻、漢
人、之、心、使、執、圖、操、能、在、環、視
驚、歎、舌、先、不、下、揚、子、雲、稱

離彖象利壯夫不為強死
確論也此言善利女無若
高者二翁為翁其父執也
翁森落譚浪倚以無人
家無依石而嗜酒好家豔
赴人急柴博士亦為吾語高
翁離一印不如妾良怒撒
之庭而出遊其妻為廢治
整淨以待其歸一見之凡
以汝欣然援刀絕執之士性
度如北山之穢華一求錢
懽如婦女子在比余故曰唯

壯夫能為離騷辭，
於尔宜之才，織絲人也。河
本詞軒，初尔宜以，
書女首為

賴襄題

○京平年間の刻印ある古物汪國子位の齋
家の花を以て此年の冬余の病ありて骨蒸
を極し又九月に余をかくて之を無延を
誓ひ得るに傳へ物をも徳くさうけんことを
終りて未をぬして活あても容るる事行
うさうしに此の古物ありて活あせし
文もあつて遊くものなり手又とて傳へも余
うつしに終るるに終るるに終るるに終るるに
る者(也)と殺しに此の死の因とせしに終
家の遺物に傳へるに終るるに終るるに終るるに

是しに塗りのお(き)はるるに終るるに終るるに
また樹家の定夜と刻し塗りの装飾あり
又一二竹笛名の刻字ありて惜しく其書を
以てて後年福の書に終るるに終るるに終るるに
歎しく此の古物に終るるに終るるに終るるに
洞とて終るるに終るるに終るるに終るるに
の味を傳へるに終るるに終るるに終るるに
ハを記勝とて終るるに終るるに終るるに
る(也)古物も其時代をあらうし一思寸
疑を定るるに終るるに終るるに終るるに

ハケミキマノリク得易クハガ珠ノ也衛家
の意ハ花ノ末歴ニ此無クハ金ヲ重ニ
~~~~~ト先キマ得ル天平考類ト其ノ家  
寶ト云クシ(大政文庫一記)  
○京都ノ所キ時ノ中を以テ書畫を以テ  
中林(沖流)枯洞の意を以テ其ノ意ニハ  
心ノ和氣を畫セシムルハ海内ノ後モ  
画寶

つとせんせのうきことか  
あつとせん

山ノ下ニキルハ一ノ山ノ下ニ

終ニ此ノ唯ト辨ノ

凍石 冠骨印

紐馬様 其ノ意馬心様ノ意

依ニマサシシニ改言

ナ

壽山石七分四方印

白 上部七分色 下部三分

白 鈕蓮花

二顆 珠ノ下ニ

○田山大正と云ふ(二女目)おのりこは接子  
おのり中おのりこ(二女目)五月廿五日

おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)

おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)

おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)

おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)  
おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)おのりこ(二女目)



権右衛門と善右衛門

鈍右衛門

(五〇)「旦那さん」の多藝

○權右衛門が金持たらんと志せし理想の「鴻池の旦那さま」たる當主善右衛門は多趣味多藝の人なり、畫は南北宗存世繪の別無く寫眞盆景刺繍押繪煎茶抹茶生花等之を好むばかりならず、之が技術に堪能なり。

○殊に三味線を善くし、百人首の和歌を節附して絃に上せしことあり、大阪にて所謂地歌、江戸歌の如きは、元よりお茶の子となす。

○盆景と押繪は、彼の技藝中優れたたるものにして、瓦屋町別邸の稻荷祠の繪馬額に、三條小鍛冶宗近が刀を鍛ふの押繪を掲ぐ、善右衛門の自作にして紅袍白面の宗近、烏帽の弟子、頗る風采あり、本職も及び易からじ。

○盆景の如きは、價を問はずして珍石奇塔の材料を求む、興平りて己の欲するものを得んとするには、時と場合を顧みず

矢も橋もたまらざる性急にして、之を得れば一心不亂に造作に従ふ。

○或盆景會に、午餐をも忘れて午後三時頃まで夢中になりて景を作り、作り了りて大息し、「生れて初めてしんごいと思つた」といふ、その熱心の甚だ急にして、若し馴れざるを察するに足る、彼が押繪にしたる三條宗近は、此熱心ありて、此苦を勞苦と思はざる鍛錬に依りて、初めて刀劍の名工たるなり。

○斯く熱心性急に造れる盆景も、一度用を了れば之を寫眞となし、敢て火に見しめせずして直に之を壞す、材料注文の際には繪師に圖を作らせ、若し一分一厘も己の意に違ふことあらば、大に立腹す。

○彼曾て茨木町邊に行樂す、所謂殿様遊にして盆厨を携へ起居の道具を齎す、彼は何か急に興の催すことありて、大阪ならでは獲難き品を從者に求む、從者はその求むべからざるを告ぐれども聽かず、無いことがあるものか、尋ねて來い」とは彼の命令なり、但だ竟にこれ無きを知りて興味索然、直に行樂を止めて大阪に歸

りしといふ。○彼は年齒四十六歳なれども、時に或は一層の老人の如く、或は極めて無邪氣なる子供の如き舉動あり。○居常他人に應接するを好まず、また親しく交るものにも、極めて心安く馴々しきことあるかき見れば、また極めて疎疎しく路傍の人の如く思はしむることあり、彼に親しき某の曰く「鴻池さんは一寸心のわからない人です」。

○彼は、潔癖あり、食器食品夜具蒲團より箸の類に至るまで、自分の物の整然とそ處を得るその物を定めたるを用ゆ、若し少しにても粗末に扱はる、か、自分の常用のものにて無きかに於ては、彼は佛然色を作して手に觸れざるなり。

○儒教の禮に、魚肉野菜などの切目正しからざれば食はず、席正しからざれば坐せずといへる、善右衛門は甚だ禮儀に富みたりといはんか、畢竟殿様通有の潔癖とせん。

粧水を顔に施すは俳優に似たりと、人が容儀に注意することは、敢て異とするに足らず、西洋の風俗にては三日程経し髪剃らざる男は宴會の席に入るを許さざる例もあり、外國より歸りし者が、洋行前の不精に反し、朝の化粧に一時間を費す位のごとは普通あることなり。

○然し善右衛門の化粧は、西洋風俗に倣へるにあらず、即ちまたその潔癖より來る。

(五一) 趣味と意思

○善右衛門の多藝多能なる、なほ手品に妙を得、所謂養老流の舊式を究め時々人を驚かすものあり。

○彼はまた俳諧に心得ありて、蘆好(一に青峰)と號す、これは先代善右衛門が俳諧を好みたる感化ならん、先代は蘆粹と號し、二疊庵桃合といへる宗匠を顧問とし、別家格に取立て、鴻池屋源助と呼ばしめたりと。

○善右衛門の蘆好の句に「猪打つた話しや春もまだ寒さ」あり、銃獵好の弟新十郎が、手柄話なごせる折に出でたるものか、さすれば情味を増す。

○遠騎や霞の中を折かへす」は、一時彼

が馬を好みて馬場の稱を得たる頃なるべし「鬚刺つた顔、鬚に見られけり」は、彼が化粧に悠然たる態を諷ふに足る。

○此等の句にて察するに、彼の多能多藝なる、また文學者若しくは詩人たるべき資あるに似たり、その句の直情を見はせる、必ずしも月並にあらず。

○或人の話に、芝居見物に於て住友吉左衛門は平民風にして、善右衛門は大名風なり、俳優の最良も、吉左衛門の好むは片岡仁左衛門にして、善右衛門のは市川齋入なり、善右衛門曾て南地青樓富田屋に遊び、齋入を招く、齋入來りて膝行頓首す、善右衛門は容儀を繕ひ、一室を隔てて語る、酷だ昔の大名に似たりと。

○吉左衛門は、俳優の藝を見れども、善右衛門は、藝よりも俳優を見る、今日の芝居を見物する所謂何々連なるもの、俳優の如何を問はずして藝の如何を見るもの幾人かある。

○青樓富田屋には、鴻池家定紋を蒔繪にせる食膳器具を具へ、特に善右衛門の遊興用に供す、曾て親戚三井家の家人來り

入、飯櫃の酒、鮮鱸の肴、住友の陣中歌吹海裏、彼酔うて得意の俗曲を歌ふ、二井家人爲に瞳若たり。

○しかも彼が遊興の趣を、弟新十郎に比すれば頗る異なり、新十郎は豪絲哀竹の間、妓を集めて談笑し、諧謔を弄し豪華を喜ぶ、善右衛門は寧ろ小室の淺酌低吟、多からざるの妓に騒がしからざる歌を愛す、彼は陽にして此は陰。

○彼の趣味とする處、興とする處、概ね斯様なり、彼に接近せる某は、住友を以て當世の人となし、彼を以て大阪風の若隱居なりと謂ふ。

○住友吉左衛門が、大阪府に圖書館を寄附したるに對し、善右衛門は、何をか公共の事に致せる、海防費義捐金の如き昔より最近青森火災に百金を義捐せるに至るまで、彼の名を以て社會に義捐せる積年の金額は、定めて吉左衛門が圖書館を致せる二十餘萬圓金に下らざるべし、此等皆公共事業ならざるに非ず。

○されども吉左衛門の圖書館は、自分より之を大阪府に提供したるものにて、吉左衛門の意思を明確に表し、善右衛門の

りしといふ。

○彼は年齒四十六歳なれども、時に或は一層の老人の如く、或は極めて無邪氣なる子供の如き舉動あり。

○居常他人に應接するを好まず、また親しく交るものにも、極めて心安く馴々しきことあるかき見れば、また極めて疎疎しく路傍の人の如く思はしむることあり、彼に親しき某の曰く「鴻池さんは一寸心のわからない人です」。

○彼は、潔癖あり、食器食品夜具蒲團より箸の類に至るまで、自分の物の整然とそ處を得るその物を定めたるを用ゆ、若し少しにても粗末に扱はる、か、自分の常用のものにて無きかに於ては、彼は佛然色を作して手に觸れざるなり。

○儒教の禮に、魚肉野菜などの切目正しからざれば食はず、席正しからざれば坐せずといへる、善右衛門は甚だ禮儀に富みたりといはんか、畢竟殿様通有の潔癖とせん。

○或人の話に、彼が朝起洗面を了るや、鏡臺に向ひ頭髮を梳る芭蕉葉の如く、化



不出果むもさういふまに一葉五午田位出来松  
身ぬらうらと花さぐ、本今の道なる未  
りより海志をぬくと花さゆるとと七浦  
らゆとお平入らゆ(三葉ろお平らうら  
まらぬらう)一由らるむ返陣することよ  
物らと、中津あゆ物さもさううくたいら  
かち、物らゆらゆ人をねゆしことる五  
田も今んまんと花さぐ二千位ゆをきせし  
に物さうらるあゆのき代うる五十四  
と三小格ぬひある、地万まも、うつと花

ふが草集初より引あゆ、又ゆは、身と  
まゆのさゆぬらゆのゆかある、流人やゆさ  
うあゆのゆけゆせしととまるゆをぬつこ  
しゆも目ある、まんと花さゆらぬゆ  
うのあゆむむ刻念の大きき効果らるつこ  
しゆかある、さうらしと今一ゆまゆら  
十葉の白きつりゆらゆゆあゆまゆの大  
はゆ十葉の白きつりゆらゆゆあゆまゆの大  
何らあゆむら大花の有力あるま早ゆら  
流ゆをかつことらうらうら、うらゆら



ハ決して悔えなき、免：角半歳を奉りて  
七出来る丈の効果も収りてが、其後約年  
の和登ひあるも、かゝりも其後を切ら  
り日、和登ひあるとておぼろある  
の由、四十二年五月廿一日大改退陣  
と臨むを志す

の原平一任同并記

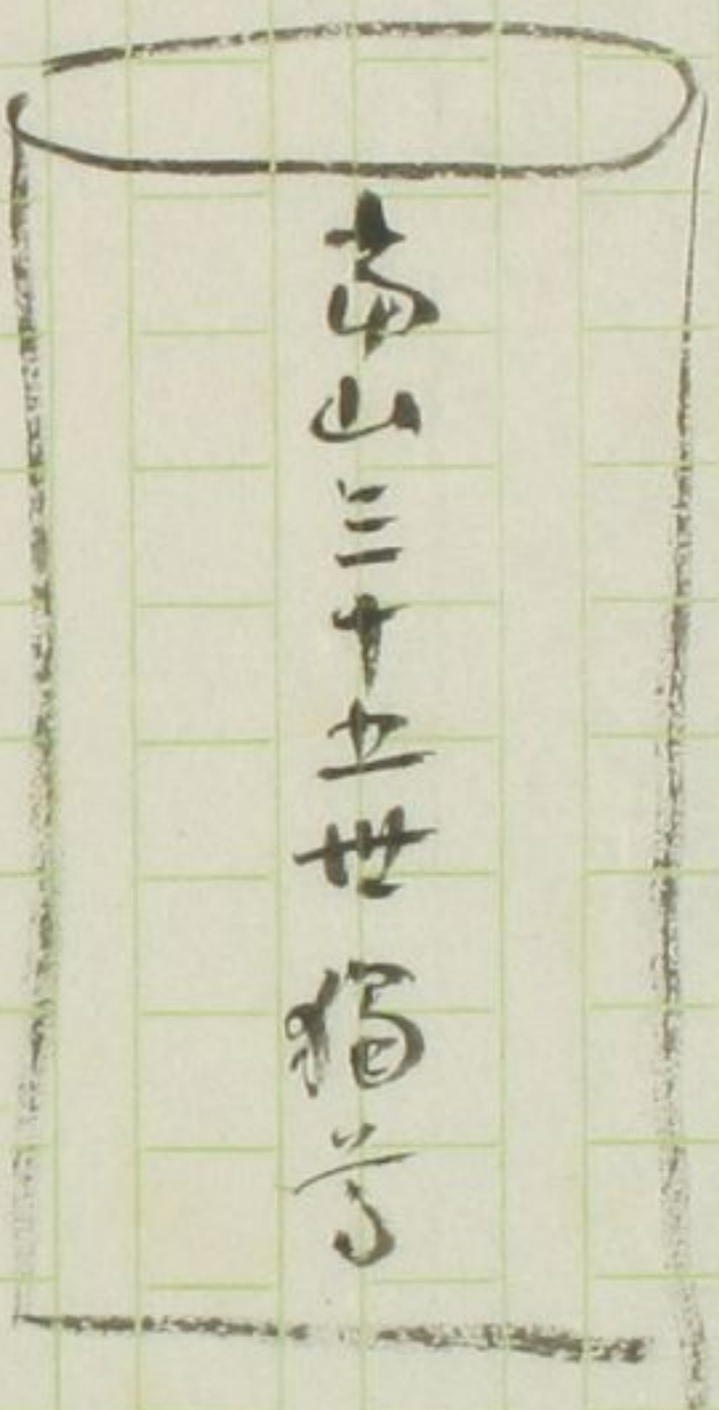
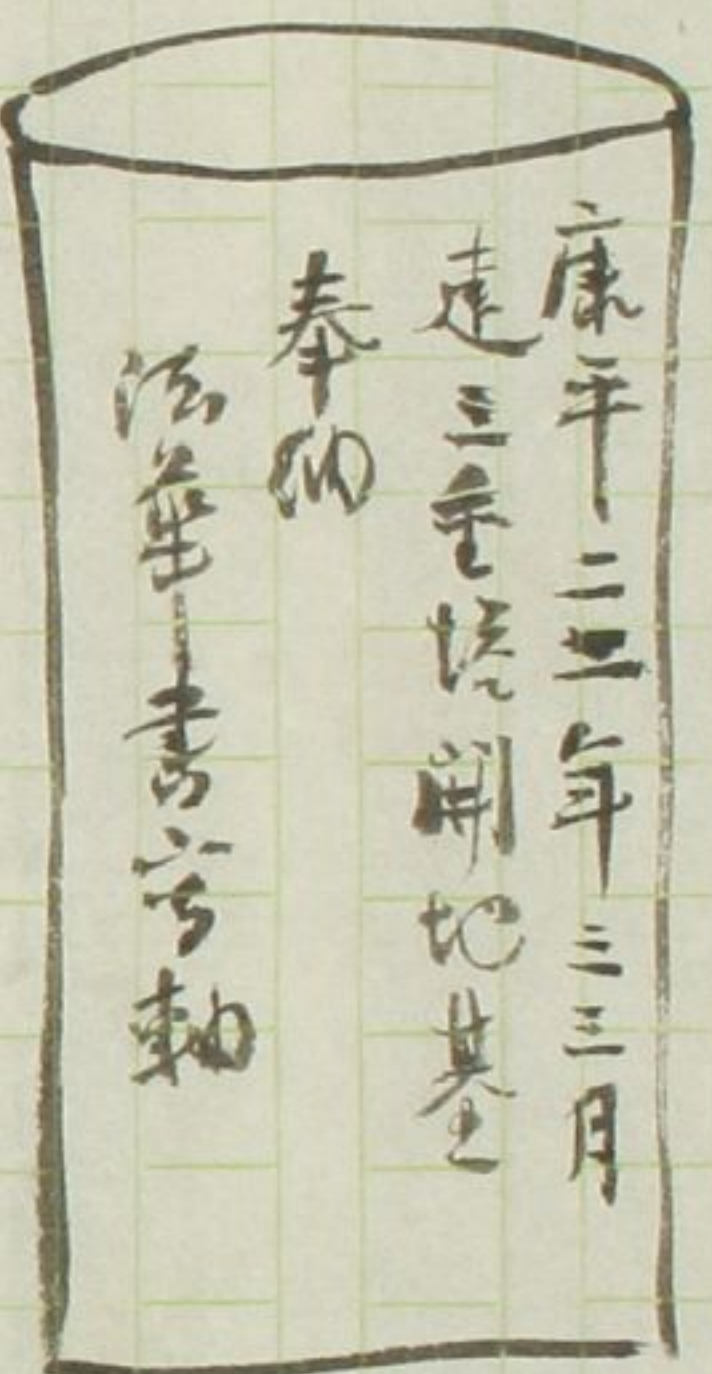
我あを深川一任の幕方代も、  
かろ、巾着連のころ、人冬木家とし、  
お位に任し、初来との言葉、  
その由も、由漸家らし、  
也

ヤ

西漸家の花押ある、  
札、題、外、目、  
とぬる

これの一、  
又五十二世（名刺着）の札あり、  
札全紙

目録の字右の如し



一口丸斗

四十四分

四十五分

一二尾

四寸一分

一高斗

七寸一分五分

一掛目

五寸二十九分

右に白目ありし御本也

真室 花押

附比前々若く刻を以てし記を以てし  
漢字朱漆しし 法華書字軸既同

と記しありし

甚だしく後を述べしもの口の事ゆ

甚だしく後を述べしもの口の事ゆ

文政壬午三月廿百甚だしく後を述べしもの口の事ゆ

一ふゆねの事ゆけしもの口の事ゆ

おぼろげし甚だしく後を述べしもの口の事ゆ

甚だしく後を述べしもの口の事ゆ

馬山花

とありし

余よりゆきしもの事ゆえしもの口の事ゆ  
み七十の事ゆきしもの事ゆえしもの口の事ゆ

五月廿九日大改ししもの口の事ゆ

甚だしく後を述べしもの口の事ゆ

元玩者の記ししもの口の事ゆ

國書刊行會

國書刊行會

の帝四天子を彫刻する若干の圓像及び  
其の初より圓像と號を同し古柱の文即ち  
一の彫刻ありと成し 特ニ二段の板本  
と彫る一と曰ふ餘の圓像の彫り一と  
云ふを以てたゞ彫るを以て其の解説を  
し

山東流布の武侯祠刻像板本を以て  
刻本也而して帝大石本と原元の板  
本を以て彫ると云ふを以て論を傳へず

### 解説

三 孝堂山漢圖像刻石 三石 五枚

出處 清國山東省肥城縣孝里舖孝堂山東北麓。

來由 明治四十一年一月六日發掘地下三尺許り處

ニ蓋石ヲ得其下ニ背石及兩脇石ヲ得蓋石ニハ  
彫刻ナシ他ノ三石内面ニ淺彫刻圖象アリ即チ  
今回將來セラレシモノナリ。

摘要 後漢時代ニハ墓前ニ石祠石廟ヲ建テ圖像ヲ彫

刻セシコト 往々古記録ニ見エ孝堂山下ノ郭巨石室（永建四年西曆百廿九年後ノ題名アレバ晚クモ第一世紀頃ヲ下ラセリ）嘉祥縣ノ武梁詞石室（建和元年西曆百四十二年）ハ其纔カニ今日ニ残存スルヲ得タルモノナリ 此等ヲ参照スレバ此三石ノ墓前ニ建テラレシ小石祠ナルベク其郭巨石室ノ立テル孝堂山ノ麓ニアリテ彫法ハ武梁祠ノ者ニ題シ一層古拙ノ趣アレバ大要西曆第一世紀前後築造セラレシモノト推定スルモ不當ニ

アラサルベク漢代ノ藝術并ヒニ墳墓ノ制ヲ研究スル上ニ於テ孝堂山上及武梁祠ノ石室ヲ除キテハ清國ニアリテ殆再得ベカラレ無ク好標本ナリ。

### （三）晋陽山漢圖像刻石

一石 一枚

出處 清國山東省濟甯州晋陽山慈雲寺天王殿壁間。  
來由 明治四十一年一月七日將來。

摘要 此刻石ハ石室ノ山左金石志等ニ載セラレシ清國ニ於テハ古來著名ノモノナリ年代ハ大要前者ト同シカルベク孝堂山郭巨石室、武梁祠石

室圖像ト一種彫法ヲ異ニセル珍奇ノモノニシ  
テ漢代石祠ノ残石ナルベク當時藝術ヲ徹ス  
ベキ好標本ナリ。

(三) 奥台縣漢圖像刻石

二石 二枚

出處 清國山東省奥台縣張家口。

來由 明治四十一年一月十五日將來。

摘要 此二石亦漢代石祠ノ残石ナルベク其彫法前  
者ニ比シ相同シク當時藝術ヲ見ルベキ珍品  
ナリ。

○字幅の圓まは：海を流る新大  
まんとししはゆを士 節もみりて  
法次九ありと 衆人の世より時らきことを  
じんの色くもをるはえそのくをお取う  
まをまをらんくを今より切たしがよく出  
来まをん先年より今日のを 法九のとけ  
今よりしはぐ、困りより板表をまを  
まを一面より一枚つ、まをんを 日辛のし  
おくくことよりまをまをまをまをまを  
藝術のすまはれ ちまあるを佐しし足

くわく藝術家の著きもき。言ふところに入らぬ  
ものと云ふ事なり

の字種をみるの際、ふ家と読まざる所例の寺  
院、ある事、一、所、所、所、所、所、所、所、所、  
一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、  
さうの語、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、山、  
え、あ、く、が、大、概、如、電、の、形、字、記、る、に、記、し  
て、あ、ら、う、と、示、さ、ん、と、思、え、ん、の、と、る、此、の、式  
の、有、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、  
ひ、の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
ひ、の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

たむ略し、たむと湯とをいへる、今、た、ん、ん、ん、  
電の類、字、記、を、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、

天保十一年十月、日、世、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、氏、

其、意、の、す、ま、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、

と、形、字、記、の、す、ま、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、

形、字、記、の、す、ま、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、  
(中略)

形、字、記、の、す、ま、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、

と、形、字、記、の、す、ま、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、

と、形、字、記、の、す、ま、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、

と、形、字、記、の、す、ま、ら、ぬ、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、の、事、を、い、は、す、



君山深川ぬ山三上代山三人を伴ひ此處  
くかきんを修儀院の大書院にまゐる  
此の修儀院に最殊に修儀院に  
修儀院に修儀院に修儀院に

帖子にて辯才天行一百八座の修法儀則なり。按ずるに寫經功德に  
漸寫頓寫の二法あり。漸寫とは時日を期せず一筆もて一卷若くは  
一部を自寫するもの。嚴島なる平家一門の一人一品つゝ寫したる  
法華經などの如し。頓寫とは頓次に一經を寫了するにて衆人の力  
に依り即時速成を主意とす。此修儀は題目に頓得寶珠とあるより  
古來頓寫せしものと思はる。

修儀の帖子は豎五寸幅四寸半許。紙數五十折にて片面六行づゝの  
立罫ひき修儀の方法を記載す。同し寸法にて白紙罫引の新帖あ  
り。大書院の上中一室を開け通し其西側中央に長き机を幾脚も一  
文字に繼ぎ並へ其上に新舊兩帖を延へ披き舊帖を先に新帖を手  
前に兩々相對して列ねたり。

參會の僧俗二十餘人なり僧の首座は行者眞應僧都にて上野淺草  
の兩僧正より僧衆十人許整坐す。如電は半僧俗の身にて其末位に  
在りて俗衆の筆頭となる。從ひ來れる幸堂代山如調なんこ其次に  
並ひ。他の人々も一同平列に居ずまふ。一人に帖子一折つゝ各二  
十四行を受持と定む。筆硯は各自に給せられ般若心經を同音に三  
誦す。此二誦の間に墨するなり。寫法は原帖を手本として其行配  
り字配りに彼と此と移し寫すものなれば。手風こそちがへ文句つ  
ゞきは差ふ事なし。懸腕にて正書にかくあり行體を帶ふるもあり。  
遲筆あり達筆あり筆もつに單挂あり雙挂あり。巧拙健弱くさく  
にてありき。頓寫の主意は初めにも云ふ如く一刻も速かに寫し終

ふるにあれば我が受持を早く了りたる時は他人の餘白を手つた  
ふも支へなしに聞き。余は三上とは二三人の領分に切込イナ筆つ  
き込みたり。かくて表面を了へ裏面も亦復かくの如し兩面各五六

三

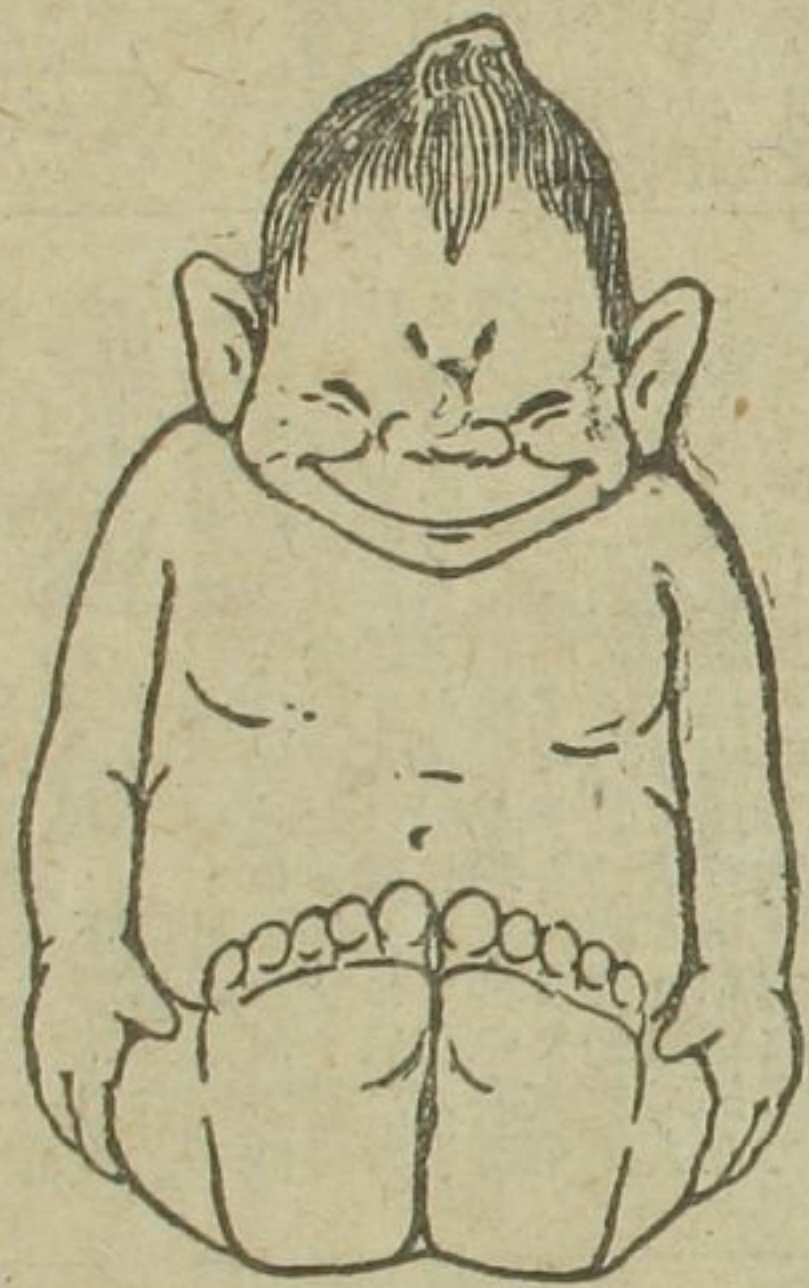
十分の時間をあつてゆゑ、近年おひひと  
松竹を唄ふては、さうしてさうして、  
さうしてさうして、さうしてさうして、  
さうしてさうして、さうしてさうして、  
さうしてさうして、さうしてさうして、

さうして平曲を奏して、さうして心  
を、さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、

さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、  
さうして、さうして、さうして、

# ふくく神の ピケケン



久しく品切れの所今日より分與開始福運を望む仁は無くならぬ中に注文あれ

ハレ一彗星の漸く近づきつゝある今日禍を斥け福を招ぐピリケン御進物に最も妙也

製一ダスバラア  
分五寸五共座玉丈  
錢十五圓二體壹  
錢八十料送

目丁二町張尾座銀區橋京東

部理代堂期光

四八四〇二京東替振 七六七二新電

御進物のふくく神の心を丹を洗し節を  
 心の氣の散るやきしきんは節の神  
 心もいひ又さく字漢脱字甚しと  
 誰しもあつめやううきも程も  
 口もゆもりのまの言物をひるた来の  
 例式いやくもさうさうとさうは又  
 あう強しとも亦さうし  
 〇米田の福の神一、名をピリケンとさふ、まじ  
 ーとさめあ滑知方の、船のき、人おを心  
 ー、試みぬ備おとて人：ホセしん、ぬのぬ  
 る、お、い、佛、う、ま、大の、お、を、お、い、母、を  
 物、お、さ、う、さ、ん、ち、お、し、子、お、あ、る、は、い、つ、ま、り  
 の、お、あ、と、お、き、し、ら、う、さ、ふ、福の神、と、さ、う、り

I am the God of Happiness,  
 I simply make you smile;  
 I prove that life's worth living  
 And that everything's worth while;  
 I force the failure to his feet  
 And make the growler grin,  
 I am the God of Happiness,  
 My name is Billiken.



こそとしの或候の事を  
 のしるも 福さのゆゑに云  
 うらけうらけいやううと  
 (其進) こそ不致のうら  
 こそそのとにゆけりもあま  
 い) 志をきく、唯をきく  
 供の由を 元干年  
 を物して侍り候し候と  
 とし、さきと之れを合  
 是れ也ーと又と時

此あるう市をわし候大御所を候  
 リとつ金の初めをえり候大  
 丸の邸もわき一候も此に候  
 教条の御話と候之れを講  
 をさきと候と考ひ 懐心  
 心を得ようといふと之れを  
 とも先門福をまよふに  
 心もいふこといふ人  
 初めは此を知り候し  
 とも御所と候候候候  
 此又

此のとき目き郎のよき人希むを換ふも  
人目の跡にうけしるるあそび  
○目より後を文<sup>後</sup>の界へ元禄の傑物を也松と  
てん心なるの傑物を世の跡とてする能はず  
世の跡の前より親の跡もあつても味ある  
しるし〜世の跡〜世の跡〜世の跡の大  
天才也天才さうう上なる是れ也世の跡  
とてするし〜表の心〜人をあつとす  
えりもす〜左なる跡〜と許さんと  
る〜ゆ〜し〜世の家〜此を得し〜

天才とてするし〜世の家〜此を得し〜  
も世の跡〜一程のカヌの跡を換ふ〜  
る〜し〜し〜世の跡〜とす  
人も世の跡〜とす〜世の跡〜  
の大天才と謂ふ〜世の跡〜  
世世子の存義〜世の跡〜大切と  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜  
〜世の跡〜とす〜世の跡〜

言と事と同一くあらざるを新と云ふこと  
しるべき舊套の打破と試みたること一大卓  
然と認めざるべからざる所のありしやうを  
新樂と云ふは僅かちと云ふ田樂と云ふ  
迄命と云ふはまゝに何の意ありしやうの  
人柄ぬれのおもひなりしやうと打破せん  
人柄の端なりしやうと云ふは  
いふに及ばざるに及ばざるに及ばざる  
の傍にゆるりたるゆゑなりと云ふこと其の  
ゆゑに折れたることありしやうの弊を  
振きそのもとを潰えしむること其の  
も固く天才のありしやうを得ざるを  
も或る今の語を研究し文章の七五調  
を是れ一其の引用語の多量味を脱  
し其の元は文章の既終極をせざる  
瑕地を云ふことありしやうの思ひ  
ことありしやうの也其のゆゑに折れんと  
するが故なりしやうの人の胆戦し合  
入損ふことの弊を云ふことありしやうの  
言と事と同一くあらざるを新と云ふこと  
七五調

言と事と同一くあらざるを新と云ふこと  
しるべき舊套の打破と試みたること一大卓  
然と認めざるべからざる所のありしやうを  
新樂と云ふは僅かちと云ふ田樂と云ふ  
迄命と云ふはまゝに何の意ありしやうの  
人柄ぬれのおもひなりしやうと打破せん  
人柄の端なりしやうと云ふは  
いふに及ばざるに及ばざるに及ばざる  
の傍にゆるりたるゆゑなりと云ふこと其の  
ゆゑに折れたることありしやうの弊を  
振きそのもとを潰えしむること其の  
も固く天才のありしやうを得ざるを  
も或る今の語を研究し文章の七五調  
を是れ一其の引用語の多量味を脱  
し其の元は文章の既終極をせざる  
瑕地を云ふことありしやうの思ひ  
ことありしやうの也其のゆゑに折れんと  
するが故なりしやうの人の胆戦し合  
入損ふことの弊を云ふことありしやうの  
言と事と同一くあらざるを新と云ふこと  
七五調



さよふかうが 昔物のゆゑ 甲充 臺心  
部を言しうる 一の二半のうゝ 左 珍えとん  
言所を指す 言入目と襟  
言入目と襟  
言入目と襟  
言入目と襟

鏡のゆゑ名なきと 油鳥毛の打柄と 雑子  
鈴毛 豚形 (中 鏡 去柄) の鏡と 札  
ハ 比 割 家 方 誰 へ 古 ち ち 札 へ ち ち 札  
中 為 別 あり 物 心 出 ち ち 札 へ ち ち 札  
柄 本 木 宗 木 田 ち ち 札 へ ち ち 札

衣 ( 実 ) ( 衣 ) の 似 ( 衣 )  
焼 ( 衣 ) ( 衣 ) 指 ( 衣 ) 本 ( 衣 )  
上 ( 衣 ) ( 衣 ) 似 ( 衣 ) と 云  
ひ 侍 ( 衣 )

紫 来 階 列 の 由 々 珍 々 取 上  
入 袈 の 袈 々 言 々 入 人 氏 々  
袴 の 紐 々 袈 々 袈 々 袈 々  
袈 々 袈 々 袈 々 袈 々 袈 々  
唯 々 袈 々 袈 々 袈 々 袈 々  
此 の 式 々 々 々 々



此の物と修音の響きをきくれば  
とてうゝ深更中か活論してきき

○早稲の産球団の爪哇に振うん東洋汽船  
今此の船に乗るも此の係有るも日記を  
望海よりと新第一大隈汽船に下り物の積  
部と汽船の産球団を合せて振付し銀を  
としいといふは此の事ゆゑも此の係  
ハ海軍と此の船にぬりまの人だ、此の事  
物のありは物に深きん余も随伴して六月  
十二日去りぬ、此の船の第一と云ふは

く不出儀の結構がある遠くは  
言のよき事のことゝやうも此の儀を  
しつゝい入り口の門の石柱を全の競う一  
並むと花つとそんう云を聴くと花つと  
み電機の花つとそんうとあるつと此の  
既とそんうとある、玄洲に出入つと見ると  
三四枚の大杉片うあるうそんうとある  
靴音の節とそんうとある、此の節の  
とある、此の節材白木心とそんうとある  
個子とそんうとある、此の節材とそんうと



ススーのこころのちかちかうのりも致味うるそのと  
其の節の節部はニヤケび言うる旨味は濃ま  
らまひニ階へ上つて見る久張の上の丸の天  
井をむく風物は一板もつてつげもあま  
ナゲレもとる或十と云ふ能の面うこうけを  
ある能舞と云うる豊さうのひもる全体  
淡色のことき、ワカうぶや能の衣巻を  
らこぎも是る多ア海んの集らんと一板  
しとキ入へたことひもあまのひもあまのひ  
よのよのこころ併しうらふ物海可るを

らまひ、ニ階のナゲレも面をる其ナうけの  
はこころをえ張りふ入アテコいテロ人の  
ひもあまのひもあまのひもあまのひもあまのひも  
一と七十粒を年をあやし或十葉のりまを  
一、物もあまのひもあまのひもあまのひも  
である光の角紙換の大まひ高くと成腹  
へまひ、色子の噴かを囲ひの舞を一切  
ひもあまのひもあまのひもあまのひもあまのひも  
久張のお國人、ホテ度先ひもあまのひもあまのひも  
あまのひもあまのひもあまのひもあまのひもあまのひも





維新の際奥羽征討に有柳の吉の流轉  
 とまうて折ふと其御地ある大か路と云  
 ふ妻をたが養侍とまうて随從して關係  
 もあつて身は男とある柳の家へといひも出入  
 してま大のさゝ木といふと居る、柳といふ  
 柳の家をたが息子の段をいふある、まうあ  
 侍人とまうてあつて起つ北留を桂と  
 名をいふ柳の一人とまう柳の家へまうて  
 まうていふとまうていふ内は桂といふ  
 といふが柳の家へいふ、いふ強し此をま  
 くと田田のまうていふ柳の家へまうていふ  
 といふといふの柳の家へまうていふといふ  
 といふといふといふといふといふといふ  
 といふといふといふといふといふといふ

○大隈任然中一印の控付中 岩崎孫  
右一の政府の各々の船舶を以てして海軍の  
業もきくせられたるもの物終りしとて伯田くはた  
印も自ら印の有人ひあらん、而もろい男ひあ  
ると思つこのと浪人の癖に其方なく出づに

こととていふもあつたが折のなるは、其の行  
くとよおおつた、そのひ自命を最初山河と  
のと思つては、政府の船舶を以てして  
のまゝに、然に大久保ハ自命に船を以てして  
まゝとていふも、然るに、そのまゝとていふ  
と、所が例よりして大久保の心のうらやまを  
いふ、其の心のうらやま、大切なき、そのまゝとていふ  
其物中、むか打算あり、ハあつた、まゝとていふ  
働きの出ても、そのまゝとていふ、そのまゝとていふ、  
そのまゝとていふ、そのまゝとていふ、そのまゝとていふ、

つと居つたのが関係と違つた比、昔のあつた  
 いろくの申傷め人説の起り許さる  
 ハ伯の毎日三つる日前後に百廿四日、  
 仕送しつちことまゝらむにやあつた  
 さまい月夜つ海舟しほは達感をもしと  
 と一葉いふ

の伯の関西旅行ハ木をその大星家をもあつた  
 の飲食とくいとく困まらん、村井克齋  
 のあまは二三の詩留てん以不料理を信  
 の端好をひるん是れ、徳のこの中村操と

仕出ても一、<sup>か</sup>ちのさる一向の合の村  
 井のさか、<sup>か</sup>合が京都流の地志をいれ  
 結果の二あらぬことなるうたのあま、大  
 作のさりつたさるやあらぬのあま  
 か、行事の起る自由の事とつとつと  
 とあま、この料理が村井の比較する  
 と一、あま、いとまふ、さけいふあま  
 まい、つと、つと、つと、つと、つと、つと、  
 あま、つと、つと、つと、つと、つと、  
 と奥の方、つと、つと、つと、つと、つと、

の上ニニリき目う引ひひきりううしよ  
 大改る於大改のこ不ううまこころ  
 多し集るの多 離節を撥て於うし  
 九はううし 大改あうしと離節て  
 へあんかえんま 困ままいと散り  
 こ不しと云んううと自分も一節を  
 し誰か何じ知ること云ふとあ  
 先しと

○大隈伯語る 其言葉のまじりも一めを  
 多く事と母つらうや一を念定この又念定

そのんれまるとまゆ物る海が 臨方我候  
 まる候もあうつれ天の川一の物と家ひ  
 士(名)とまえんか(名)ん(名)のこま(名)ん(名)の  
 身かてあうも田をうう出てま(名)ん(名)私  
 一と満菊海ひうげん(名)ん(名)飲めぬらひ  
 あうあうつれ大改のま(名)ん(名)夫(名)か(名)念(名)の  
 一人(名)此(名)の(名)男(名)と(名)う(名)く(名)こ(名)ま(名)あ(名)ふ(名)て(名)こ(名)  
 き撮(名)る(名)ま(名)じ(名)や(名)玄(名)関(名)心(名)差(名)の(名)及(名)び(名)う(名)ら(名)る(名)  
 ひとをさるのひ妻も浦法がつし男(名)ん(名)あ  
 のちこー(名)う(名)し(名)と(名)起(名)し(名)か(名)あ(名)ら(名)る(名)



日此のま塔の香の印ひある世の名なき  
骨を石山に沈むせし軀體大ましく光  
輝する夜に映する冷艶を得たこふ  
ふいふまの故あるはあまの山にたゞし  
るゆゑは江の守にふまをさるる塔をさ  
門家の後漢をさるる足年解きして  
天下をさるるのこしと稱せしそ  
んし守山塔のまをさるるまをさるる  
も千うボラたふしあまのまをさるる守山  
玉のまのこしと称せし江の石山の塔

とこのまの塔のまをさるるまをさるる守  
山塔をさるるまをさるる北守山のまを  
まをさるるまをさるる三葉の塔を  
とひひまをさるるまをさるるまを  
これ全後のまをさるるまをさるる塔を  
まをさるるまをさるる塔をさるる  
まをさるるまをさるる塔をさるる  
まをさるるまをさるる塔をさるる  
塔をさるるまをさるる塔をさるる  
まをさるるまをさるる塔をさるる  
まをさるるまをさるる塔をさるる

さういふ且と守山公を世よりおぼしめし  
てこそん

○外人の事政邦人の心さうき所あるは壯  
歳の先皇の御事さうき所あるは壯

なり、左の御事さうき所あるは壯  
載りて外人の御事さうき所あるは壯

より一層の御事さうき所あるは壯

大政奉移式 昭和六年三月梅雨

清くあまの御事さうき所あるは壯

靈柩奉移式の光景(五)

▲死せる如き静寂

十一時廿五分になった、後の方の物置の  
聲は何時の間にか止んで耳障りもならな  
かつたが同時に笑はせるやうな事もなく  
なつた、群衆が益殖れて来て人の壁に  
遮られて聞けなくなつたのか夫とも餘り  
馬鹿々々しい事を言つて摘み出されたの  
か、五六間前に居る僕等では知らぬ、  
夫とも奴等とて人間だ段々時間が近づい  
て来たので知らず識らず此大典の莊重さ  
に打たれてポケットを犠牲にして沈黙  
つて仕舞つたのかも知れぬ、十一時  
卅分になつた墳墓におけ  
る如き静寂が群衆の上  
落ちた大時計が態々此静  
かさを破る如に十一時半  
の時を打つた、バツキンガ  
ム宮殿では我等の敬慕し  
て止まなかつたエドワ  
ド七世の御遺骸が今其處  
を永久に去るべく運び出

されて居る、カーン、カー  
ン、今のビツク、ベンが響  
を空中に投げる、夫が明に  
響くかと思へば糸を引い  
たやうに永く、耳を打  
つて来る、噫之が日月と其  
光を争ひ給ひし我が君の  
終を告げるのかと思ふこ  
其響が悲、哀、愁の悉くの  
音色を傳へるやうで群衆  
はモ、自分を支ゆる力  
其極點まで達して響の灰  
色の空に消ゆるに共に其  
儘滅入つて終ひはせぬか  
と思はれる許りであつた、  
「ア、神よ神よ何事か起らねば最早私は  
身を支へられぬ、早く此光景を變へさせ  
給へ」と血を吐やうに祈を上げてる聲さ  
へ聞ゆる、悲みにも色々あるが僕はコン

ナに深い幅のある大きな悲に接した事は  
ない、聴てウエストミンスタ  
ー寺院の吊鐘が鳴り始め  
る、聖ジェームス公園から  
包んだ如な砲聲が殷々こ  
空を紆り廻る如に響く、太  
鼓の音が微に夢の如に傳  
はつて来る、エドワード七  
世の靈柩は柩車を曳く馬  
の一足々々此方に近づい  
て来たのだ  
此時の静寂は恐ろしい程  
であつた、群衆中一人とし  
て聲を立て、話をする者  
は無い、言語は白から耳に囁かれて  
居る、耳を發て、之を聞かうとする者  
も涙の眞砂の上に小波の引く如にザワザ  
ワと聲のする許り、將又大雨將に到らん  
として森の立樹の囁く如にも聞ゆる、時

時聖ジエームス公園の鶏が時を告げる其  
聲が幾千百萬の群衆の聲を消して我等の  
頭の上に聞ゆる、然り此處に集まれる群  
衆からは聲のみではない何等の出来事も  
生れない、何となれば群衆は既に  
人間の集まりでない藻抜  
けの人殻であるからであ  
る、若し然うでなければ幾千百萬の群衆  
は溶けて一つの塊となり一つの心しか持  
たぬ如になつたのだ、後から後から人間  
の流れが来る、シカも其が流れ着いて群  
に入ると其時に此箇人は溶けて黒い海に  
入つて仕舞ひ其瞬間から箇人といふ單位  
を失つて終つたのだ

急に音楽が糸の切れたや  
うに止まつた、僕等の前に列をな  
して居る兵士に號令がかかる、今まで立  
てられて居た軍旗が引き下げ  
られて地面に着けられる、手取り早  
く銃が倒にされて大きな手

▲靈柩現はる

で摩でられたやうに兵隊の頭が  
一齊に前に曲がつて頭垂れ  
る、静寂は其頂點に達して  
死の神が天地を呑んで終  
つたやうなコーなると大きな兵隊  
の動悸までが聞ゆるやうな気がする、唯  
此中に静けさを破るのが時々聞ゆるサ  
ベルの音、氣の短い馬が蹄で地を蹴る音  
許り、動く物も行列が油の流れるやうに  
大きく動く外、小動きをする者は軍帽の  
羽根がビリビリとすると、騎馬が呼吸  
をする時に頭を鬱陶しやうに振り上げる  
許りである、行列はシトシト進む、驕  
て抜劍と鎗の鋼の光がビ  
カリと閃つた、四人の砲兵が馬上  
で、遅く一列になつて来た、モ、今度は何  
が續くは誰も知つて居る、古代の服装を  
したヨーマン衛士と倒銃をした近衛兵と  
の間に砲車が顯はれた、此砲  
車の上に我エドワード七  
世の御遺骸が載つて居る

のた  
御柩は立派ながら何となく質素の氣  
が満ちて居る、尤も此内に横はつて居る  
玉体の氣高さを思へば威儀を添ふべく何  
等の裝飾を要さないやうにも思はれる、  
併し仰ぎ見れば御柩の邊りには  
黒いふ色は少しもない、  
紫の皇室色さへ見ぬ、靈柩の上  
には美事なクリーム色の  
絹の柩衣が置かれて其絹の  
四隅には皇室が縫取になつて顯はれて居  
る、棺の上には王冠とクツションが  
置かれて其下には王杖と王輪とリ  
ボンとスター及びガーターの勳章が  
ある、夫れから棺の裾は皇室の紋章を染  
め出した絹で巻いてある、その下から六  
吋砲の口に當て、ある箱口が見ゆる、黒  
い物といへば之丈けに過ぎぬ、棺架さへ  
空色に塗つてある  
靈柩の列に顯れたると共に群衆の  
頭が一齊に下がつた、之は固

より怪むに足らぬ、今や死せるエドワー  
ド陛下は其宮殿よりウエストミンスター  
の陛下の立法の庭にお成りになるのであ  
る、若し群衆の脱帽叩頭がエドワード陛  
下に拂はれたのでないとするれば、夫はエ  
ドワード七世陛下の空蟬の玉体よりはヨ  
リ莊嚴なる他の或ものに拂はれたのだら  
う、實に我等の面前の御柩よりは死の靈  
氣が壓するが如く發して群衆は其威力に  
怖れ謹みて頭を下げずには居られなかつ  
たのである

大改定中時を中支度うけ印三款と

獲るる 材 封文石

三款共 鈕之一面を細

字を刻す 田生の意

歿り



剛作

満白体

劍胆

逸出



丹陽刻也、拙也



の大改定酒家を中支度うけ印三款と  
 獲るる 材 封文石  
 三款共 鈕之一面を細  
 字を刻す 田生の意  
 歿り  
 剛作  
 満白体  
 劍胆  
 逸出  
 丹陽刻也、拙也

の大意は酒家を中支度するに於て、一程、概  
 算の事、そのも、其の如く、世の中、とある、其の如く、  
 ても、あると云ふは、誰の如く、年々の如く、其の中、  
 を、連、延、する、如く、い、く、く、の、似、子、を、其、の、  
 と、ん、り、也、物、を、其、の、如く、振、入、は、け、こ、ある、如  
 く、ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、ある、  
 其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、  
 上の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、  
 ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、  
 ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、  
 ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、ある、其の如く、



浮世の女

みどり女

雇仲居

なまなか下手な藝妓よりお前達の方が氣楽で好いだらうなんて、おつしやるお客がよくありますが、何うして〜そんなものぢやありません、私なんか始め幼少時分に両親が舞踊好きで一生懸命に仕込まれ、自宅に舞臺を組んだ程で温習會だとか衣裳干だとか呑氣に育つて生長なつた頃から、段々家が失敗になつて、住慣れた綾谷の家を畳み裏店の借家住居に親子三人仕方がありませんから舞踊の師匠を始めました

ない飛だ一代記ですが、不思議にも仲間内に私によく似た境遇の人がありまして名は御免蒙りますが、その女にお座敷を終ふて歸途によく互ひに娘時代の全盛を話し合ふて泣く事があります、目下は父が亡くなつて母と二人暮らしてお底で大部分も古くなりましたので、忙しい方で喜んで居ります、別に口入屋を申すのではありませんが、雇仲居専門の入り方といふものがありますして其處へ申込ますと受持の警察へ願つてくれて鑑札を下附て頂くのです、アノ税金ですか、私輩は此様處へ見栄を張つても仕様がありませんから、一等等で半季七圓五十錢です、尤もこれを受る際に手数料とか何んだとかいつて五圓ばかり費りますそれから五六軒位見習ひして無料で追使れるのです、好い入り方だと思つてないかも知れませんが、見習ひが済むと綿物で行く處つまり小料理やどか一寸した集會なんかへ廻されるのですから、頂くものだつて極少しの上に

幾何か上前を取られるのです、そして歸りには、すつかり洗ひ物をしてお膳とかお腕とかは皆清拭までして片附るのですから、最初は全く泣を見に行くやうなものです、そして仲間人をする仲間中、入方なぞへ名引めの手拭とか扇子とかを配らなきやなりません、これは入方の家が世話をしてくれませんが、併し世話をしてくれたり、入方に限らず花柳社會といふ可笑しく聞えますが、世話になるといふ下にはお金が響くのですよ、相場は綿物で八十錢位から一圓、小紋ですと一圓五十錢位黒で漸く二圓以上です、最初は綿物の處ばかりで生意氣に俾でも飛せば手を打つてのくやうなものですが、藝は業者でない何が出るか解りませんが、大抵業人衆の事ですから定つてゐます、鎗鎗、二上り、博多節なんか必度出ます、それに手品の地の竹雀や假聲の地なぞですが、當節は藝よりも顔の好い方が喜ばれるやうになりました、すつと昇つて婚儀のに成る式事一切心得るなければなりません、

その替り御祝儀だつて大層なものです、藝妓衆ほどなくても衣裳は絹の紋付から帯も白地の金通し位は持つてゐない一寸困ります、夏向は閑散ですから昔のやうな賢苦しい事をいはずに連中達に稽古を致して居ります、マア秋口になりますんと稼業らしくなりません

ひさしに押迫を多くせや  
とまきくぬんぬ津既う着  
ひあささる客を最上

リも之を油取うて招く、自宅兼宿  
をさかしの境をいさゝかあつた、大抵の  
養を心めてあつた、藝妓の役をつとむ  
る、しんをちかぢかするの、あつた、あつた、あつた  
ひさしの境をいさゝかあつた、あつた、あつた  
あつた、あつた、あつた、あつた、あつた、あつた  
雇仲居の境をいさゝかあつた、あつた、あつた

ふれしやうの載つるをさうさう傳也揚げあはく  
とまふ(六月)とせる大改定名や

○六月十八日中開を偷ふ某の人の果ゆると  
大改の元傳止東南海を河の南海と云ふ傳の  
二名傳の事先人の名物と云ふ日か二海(尾取  
七日の元名)因しと云ふ名も来るとまふの  
南海某の事大改の事とまふとまふ七十の事と  
すまふ人の事と揚げし北地に見えんはさう  
直るの事とまふと直き地方を没けしや大改  
く法論する所とまふとまふと世あるまふとまふ

さうとまふの事とまふは支那の書論を編  
めんと出版せんその傍ら左傳を注しつてま  
りとその事とまふとまふの事とまふをおさ  
五六枚もまふとまふとまふとまふとまふと  
中井後取を出版しつてとまふとまふとまふと  
系を傍らとまふとまふとまふとまふとまふと  
方伝味あるとまふとまふとまふとまふとまふと  
を出しおさる、後取の事とまふとまふとまふと  
まふとまふとまふとまふとまふとまふとまふと  
こと一目瞭然とまふと、取書と後取の事と

略荒干のうき北の巻原のあしをこみあ  
ること初めを今むくも得る北の巻原  
の悲しく南海船中の秘書うらん子  
母の命しと或姓の圖書を母出さしえ  
あせふ、さうく跡くき、うまし、今た  
一萬目のむらう、うまをさる

一 石倉十二代活選

明季崇禎萬曆の選の所うん  
唐代のうんも四十本あつたまこ  
とん大部のうん、北東の巻を

駒羅の人とて名高く北東の巻を  
柱に余のうん所うんを内閣の二部  
あつた、改とてうん

一 石倉文選

十二冊

こんと明代の文目のうんを選び  
うん、えんも前と保せ改とす

一 百川字海

二十七冊

各書隣善の用と欄紙のうん  
南都守のうんをうんの一見足利時代  
のうん也無界十二行本の版本

と比するに異同多く版書に脱文  
之れは存するもの多し

一 羣書流要

全印

朝鮮流字を以て家原の刷行せし  
しつゝの進献をうんが紙質拙  
し可き其印刷の味拙なり

一 書集傳

四冊

後多子摺版本の跋尾に「後好  
年書の雌題あり」に後好の「蓮園  
帳中」之秘の印も捺す

一 菊波業話

四冊

版本と映さずしつゝ地方も内容  
又一印ありおゆらうありと印し南  
海より是れ或は法庵の映言を  
えんと余米と伝せし

一 元版小本

正本より中集二冊を収めるの  
必

一 東坡集

五冊

花より甲を糸を糸と考し印行



七しきり。そのととのぬんも五山別  
る。この類ひをし。一昨年、高松  
の書局の庫中より発見し  
このも、同本也。増しし。二巻本  
也。五山僧の著き。入のあり。紙の毎葉  
例のこと。とて。裏打ちせんあり。

一 陳龍川全集  
著る。唐も。ある。も。大塩後。ま。み。午  
津。考。う。と。毎。葉。標。志。の。あ。り。は。ま  
の。題。目。の。あ。り。し。

一 六訂園言所考

二 帙

大抵を。熊。本。の。し。表。紙。に。一。寸。五。分  
角。の。大。抵。の。印。を。捺。す。題。箋。七  
内容の。目。録。も。大。抵。の。あ。り。し。三。訂。の  
字。を。各。体。の。あ。り。し。ぬ。ん。も。さ。の。あ。り。し。と。異  
り。し。ち。の。あ。り。し。ぬ。ん。も。さ。の。あ。り。し。と。異  
余。も。し。と。異。三。訂。の。あ。り。し。ぬ。ん。も。さ。の  
あ。り。し。と。異。

一 廿四史の内元史外二種

南京の。あ。り。し。ぬ。ん。も。さ。の。あ。り。し。と。異。

版をもとにして近代に補刻してゐるもの  
先年内蔵湖南の獲つてゐるものと同  
し高麗のものと云ふべきであらう近代の  
版式は同じにして字體は並に  
以前のものと強き多く崩れを承  
つてあるもの多し  
そのあり

外に五二粒物しよと云ふものも  
ありて條條のありしものも  
の進献目錄を南漢平定して

と云ふと蓋ふ方の献しよる者  
佐伯考と佐伯國考の珠を  
つるしよるものと云ふしよる  
ものしよるものと云ふしよる  
を注してしよるものと云ふしよる  
しよるものと云ふしよるものと云ふしよる  
の興味をいふしよるものと云ふしよる  
の國考をいふしよるものと云ふしよる  
南漢のしよるものと云ふしよるものと云ふしよる

も忘る二時方とて余の間の事とて程々の  
海流の移りしるの中と名儒の  
多し強ふも余を以てゆるり長きを  
忘るしとてし記憶をさるる由其の四  
子を存す候しおん

一中井修右を酒をぬきあはれきり酒杯  
をおき始給飲みきり流きさるり  
修右の領字は大齋のり之れを捨しな  
うと杯をさるるをきり人に向つて回  
くはの間世の移りしと此の癖をさるり



一廣お五井蘭海の子ぶ蘭海ハ津夫  
の吹ふエハンと咳掃らむとあまを  
とまじくお籠るゝ其の回数をおく  
日修右の向ひをさるり或は咳掃  
とさるり候し軒回し候し余  
今日の回数をおくはさるり前田七前  
之四も其の又前田の敷もあまを  
其敷を示す、其敷の移りしとてさ  
中井とさるり記憶のさるり候し  
り

一 孝奉山を清尺の命を致し浄者如く終  
る心報を主るおろせ睡するいふあん  
か之んを以つて打さく其の報を與  
報もなづい

一 小竹の志代もあはれ也さえらのいふ人  
家富饒さう家も嗣きさう概とさう人  
ハ業のあもし小孝父と曰はれ扱さうと書  
人孝を非しさうし小竹もいふ人の人  
さうしさうさうと初め後の人いふ  
向うさうと孝父の方の<sup>あつた</sup>あつた

一 iringもやあつたはさうのいふことをあつた  
まきのいふあつたさういふ中日記  
數十冊あつたはさうあつたことさう大  
あつたあつたさういふことさういふ  
云いさういふあつたはさういふ大さう  
起るあつたあつたあつたあつたあつた  
山ゆあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
あつたあつたあつたあつたあつたあつた  
一 屏風のあつたあつたあつたあつたあつた

とを云ふるを又いはし切の所片の者  
 きつゝこのうを推寛らしし概観の亮を  
 長男の名を意文字子成と余するより  
 を認め禮服を着けたるも余をを云ふけ  
 しとふしとあるし又意のううささし  
 して又のりのあひまの注しあると成  
 る程子成とこの母の母と母の母と  
 遊<sup>レ</sup>幸ふこと<sup>レ</sup>也<sup>レ</sup>

一 頼業の先妻の離あつて其の母の  
 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたるの事ありし事ある不  
 成りや成り夫あつてはるる事ありし  
 二 信<sup>ハナ</sup>と之を離あせし事ありし事ありし  
 三 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし  
 四 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし  
 五 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし  
 六 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし  
 七 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし  
 八 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし  
 九 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし  
 十 弟の信<sup>ハナ</sup>と上<sup>ナ</sup>去りたる事ありし事ありし

一 頼業の外史や信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 二 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 三 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 四 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 五 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 六 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 七 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 八 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 九 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし  
 十 信<sup>ハナ</sup>の事ありし事ありし



かしこく早くうらぬ余の子説を聴きよ  
 入んぞんを得意氣のそそのを山物  
 田を多とてそそ刻しむしおきよなる  
 障子の細いことうと聴きこらう中  
 余もよあふそそ入の氣を晴を柱え  
 七不をそそるんはひせと抱くわうと云  
 へか敬むかうくとつえひえと流るん余  
 をゆるそとのと云つこと教子の親のす  
 點を並記しはよの記と載つてある  
 一山ゆ教下のあふそそ序を作る文ゆ一教

所を江ぬの人とのそそ教を流つて思ふ余の京  
 都へるそそこと入のそそ所向はぬのせとそ  
 ずや山ゆわうそそとそそそそそそそそそ  
 ぬとそそそそそそそそそそそそそそそ  
 たりそそそそそそそそそそそそそそそ  
 二文章のあふそそそそそそそそそそそ  
 く  
 一尾をそそそそ(二海)と通夫のそそそそそ  
 説を授けぬ通徳もある終白傳ますそそそ  
 一とそそそそそそそそそそそそそそそ

ふ志きはあまも大政ちんとえしとてその  
花うしとてさや

一 二海の妻ちまきのあまと姉妹さう二海  
文活をぬむ山物ゆふの節を逢る入道文活  
を試ふ二海も又まことこゝろ聴く葉のお  
バてまらるる二海のあまはすまふあつこ山物  
を叱れりともあまのあまはすまふあつこ困  
早くおあまをさすまふと山物をしえんて  
あ

一 山物ハ都老のハまうしこと花方南らむは  
く所也山物をあまの葉の家常うと逢る  
山物を門を閉りも酒を売を謝しを初を  
あまはあまを思ふもあまはあまはあまは  
り出つりあまの今も又山物をあまはあ  
儀も酒の逢るあまはあまはあまはあまは  
あまのあまはあまはあまはあまはあまは  
宅も酒の逢るあまはあまはあまはあまは  
其人あつこあまはあまはあまはあまは  
塩鯛さうんとあまはあまはあまはあまは  
あまはあまはあまはあまはあまはあまは



又聞せしりつとも塙鋸りしゆり也  
同ノ如家と讀しんて

一先以強しる在りぬての母さむとすれり  
仕くしんてのさむりも山切の節をそま  
山切の徳をよびぬるのち毎に山切をぬ  
内をさるるもぞある年一山切の妻たえ  
てもさしに其の如くぬるの者たへ切  
り身とほふるも出りしり之れ日よ其るを  
つらんはぬたけり市田致しあつてしんせ  
ふはき出すことなるもいふ餘の如くぬる

ハひとく困るるいことあつと読し

一山切を山切の其處所をいふてしる一入る  
しんて山切の如くぬる山切の昔の如く  
まてきき銭のりりぬるの如くぬる  
山切を山切の如くぬるに多くの場合ぬぬれ  
あるしぬるの如くぬるをうけ、山切を  
人の如くぬるいづも其ちをぬるのそゆしん  
ぬるの如くぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
山切の如くぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる  
ぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬるぬる



○家老の古物や大國康平、長らく寛と  
首飾りも古物多しなり、佐藤誠の遺品持  
ちり定名持込横山、洲山也、西河との流次  
海への舟お、西河とちと、洲山の芝舟あり  
し、江戸よりこれ名の人物也、子のあとも、花ら  
をぬき、後年、作、舟、遊、龍、船、のみ、く  
死す、其の書、数、河、あり、花、の、跡、の、改、を、  
と  
○六月十九日、梅、の、節、に、降、し、大雨、の、り、甲、  
子、の、き、こ、し、と、創、り、し、し、保、善、の、の、り、入、浴、

梅、の、節、に、梅、の、古、物、あり、し、こ、り、入、り、し、  
梅、の、茶、の、一、輪、を、ぬ、き、し、り、お、ち、り、し、平、河、  
と、り、し、唐、の、と、鏡、の、は、は、ち、ち、し、し、の、物、大、  
く、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、  
市、の、物、あり、し、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
印、も、古、物、し、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
る、記、し、り、り、し、り、り、り、り、り、り、り、り、  
し、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、  
き、箱、の、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、り、



○津田徳孝と云ふ大坂の織商使つ大坂  
を以て其の山形  
の印を授けし中先生は其の目撃の  
みと云ふ事ありしに其の  
人として其の事を知る者ありし  
ありしと云ふ事ありしに其の  
○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の  
○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の  
○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の

○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の  
○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の  
○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の

○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の  
○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の  
○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の

○江州商人一社の義兵と云ふ事ありしに其の

に柱けつはあせむの商人を防其切を一旦築  
きよけし基礎をたてよこと業にあり言  
ひあせむの商人を防其切を一旦築  
けり代を付ひする商人を交へす而して  
番代もしん家を大坂の持ゆるを許せん  
書れおし商人をも防其切をたて目さ  
大坂のこときとあせむの商人をたてよこと業  
に本ると取をも防其切をたてよこと業  
月二一四位からよゆくのあせむの商人を  
あせむの商人をたてよこと業の商人をたて  
大りよけりするあせむの商人をたてよこと業  
番代のお互の切をたてよこと業の商人をたて  
の世替もあせむの商人をたてよこと業の商人をたて  
あせむの商人をたてよこと業の商人をたてよこと業  
の商人をたてよこと業の商人をたてよこと業の商人をたて  
の一端を以つて指すをたてよこと業の商人をたて  
あせむの商人をたてよこと業の商人をたてよこと業の商人をたて  
座せしむる商人の切をたてよこと業の商人をたて  
田井本の切をたてよこと業の商人をたてよこと業の商人をたて  
をたてよこと業の商人をたてよこと業の商人をたて

美術館の英國の部に皇室より御貨奥品の  
中に小さい卵形の硝子の中に直径二三分  
位の鉛弾が入つたものがある、小さい札  
に只「子ルソン將軍を殺し  
た弾丸」と書いてあるので皆氣が附  
かすに行つて仕舞ふ、とすると、コン  
ノート殿下は一同を呼び  
止めて、之れはトラファルガーで子  
ルソンが戦死した時の弾丸を取出した  
ので、能く見ると金モールがついて居る。  
夫れは肩章に中つて身體に入つたので肩  
章が彈丸について出て來たのであると説  
明されたので、お伴の日本人一同は大に  
恐縮しながら始めて夫れを知つた。  
伏見宮殿下には一旦御歸館の上夜九時過  
再び來場されイルミチシヨーンを御覽の  
上スタディウムと稱する運動場の大煙火  
を御見物の上御歸館遊ばされた。

伏見女子日英博覧會  
清徳るりおの記るる  
ちのりの上、物派を  
の文を載り、ヤミん  
ソンの念強みののあ  
り却核のこころ

梅雨の湯々、急な雨の陰人、とて、  
たゞ、と、傳へ、よ、こ、と、直刻の印を



文云  
梅礎  
一潤肥

おとしららるる  
六月廿日  
大坂

のつら内赤田南とやの南をい付ゆに一と云  
 去為寺の東寶塔疏の楊をを云々入し云と  
 著心者を修めたる者其等後記をもて天武帝の衣  
 箱と傳くを云々しとの記が書ける余の南を云  
 つら由風を云々劉増多羅尼陀と酷似し  
 たる天武と云々は此物も由風と云々又鉄文  
 の款像と成斗と云々も似たりハ此れぬら白  
 鳳冠も丙戌の款疏と云々は伝之の云々云々  
 ハ款像の云々道徳と云々人の年數と云々  
 浴衣と云々龜と云々との云々心と云々の云々  
 行るとして後流るる云々ハ一研文物也  
 あり

○東宮を云々(陸奥の高木曾其正統)花  
 と一を云々、擧ぐしてをせざる者、相書はッ  
 ニギリと煙草の因を添く云々ハ一と御典  
 と似たり云々の物也云々ハ、宮と云々の  
 擧しッニギリと云々の葉を云々の云々の  
 云々のカカを云々の入る云々の云々の  
 延日と云々の云々の御と云々の御と云々の  
 云々の握し云々の云々の三と云々の云々の握し



助の花巻はくしと思ひの甚く其意ふあ  
らう後を補ひしこと蓋意ふ谷の  
印ありしをちる河の刻を教ふるは代  
刻のツンギリとおあるの傍に白珊瑚也  
あ代一流の角鏡を造つては北村もあ  
光彩をまがらんうじやらんくくらん  
例ありし

○珍を布りたるは徳南海の書物一軸と  
購ふ紙とをもち大の茶福をも言ひし  
紙換りといふ<sup>（一）</sup>と<sup>（二）</sup>と<sup>（三）</sup>と<sup>（四）</sup>と<sup>（五）</sup>と<sup>（六）</sup>と<sup>（七）</sup>と<sup>（八）</sup>と<sup>（九）</sup>と<sup>（十）</sup>と<sup>（十一）</sup>と<sup>（十二）</sup>と<sup>（十三）</sup>と<sup>（十四）</sup>と<sup>（十五）</sup>と<sup>（十六）</sup>と<sup>（十七）</sup>と<sup>（十八）</sup>と<sup>（十九）</sup>と<sup>（二十）</sup>と<sup>（二十一）</sup>と<sup>（二十二）</sup>と<sup>（二十三）</sup>と<sup>（二十四）</sup>と<sup>（二十五）</sup>と<sup>（二十六）</sup>と<sup>（二十七）</sup>と<sup>（二十八）</sup>と<sup>（二十九）</sup>と<sup>（三十）</sup>と<sup>（三十一）</sup>と<sup>（三十二）</sup>と<sup>（三十三）</sup>と<sup>（三十四）</sup>と<sup>（三十五）</sup>と<sup>（三十六）</sup>と<sup>（三十七）</sup>と<sup>（三十八）</sup>と<sup>（三十九）</sup>と<sup>（四十）</sup>と<sup>（四十一）</sup>と<sup>（四十二）</sup>と<sup>（四十三）</sup>と<sup>（四十四）</sup>と<sup>（四十五）</sup>と<sup>（四十六）</sup>と<sup>（四十七）</sup>と<sup>（四十八）</sup>と<sup>（四十九）</sup>と<sup>（五十）</sup>と<sup>（五十一）</sup>と<sup>（五十二）</sup>と<sup>（五十三）</sup>と<sup>（五十四）</sup>と<sup>（五十五）</sup>と<sup>（五十六）</sup>と<sup>（五十七）</sup>と<sup>（五十八）</sup>と<sup>（五十九）</sup>と<sup>（六十）</sup>と<sup>（六十一）</sup>と<sup>（六十二）</sup>と<sup>（六十三）</sup>と<sup>（六十四）</sup>と<sup>（六十五）</sup>と<sup>（六十六）</sup>と<sup>（六十七）</sup>と<sup>（六十八）</sup>と<sup>（六十九）</sup>と<sup>（七十）</sup>と<sup>（七十一）</sup>と<sup>（七十二）</sup>と<sup>（七十三）</sup>と<sup>（七十四）</sup>と<sup>（七十五）</sup>と<sup>（七十六）</sup>と<sup>（七十七）</sup>と<sup>（七十八）</sup>と<sup>（七十九）</sup>と<sup>（八十）</sup>と<sup>（八十一）</sup>と<sup>（八十二）</sup>と<sup>（八十三）</sup>と<sup>（八十四）</sup>と<sup>（八十五）</sup>と<sup>（八十六）</sup>と<sup>（八十七）</sup>と<sup>（八十八）</sup>と<sup>（八十九）</sup>と<sup>（九十）</sup>と<sup>（九十一）</sup>と<sup>（九十二）</sup>と<sup>（九十三）</sup>と<sup>（九十四）</sup>と<sup>（九十五）</sup>と<sup>（九十六）</sup>と<sup>（九十七）</sup>と<sup>（九十八）</sup>と<sup>（九十九）</sup>と<sup>（百）</sup>と

大書しありし十数ありしと云ふも  
わうまを田やせしと云ふも  
この所をみるは中年頃の事と云ふ  
花は南海の書物なりしと云ふも  
のちの事なりしと云ふも  
ぬらうしと云ふは海なりしと云ふ  
しるし（六月十日）

○二月十日の川向をまう其の山に  
る卷子本古方文選と撰著し  
黄麻紙上下欄外腐蝕し

家を侵さば惜うま前頭潮け元うまか  
 書ハ方言凡ハ唐抄ありあまか元分和様の  
 熟ししう初うま楷書せうまうく美まの  
 うま也行成道入うまの趣うま恐うま天  
 曆を下さるうまの注ハ李善注を取ら  
 別ハ我現在書目の内ハうま其名を存し其  
 書ハ亡佚見るを得可うま文選鈔を  
 添加す則ち冠鈔書を冠する注日造也  
 叔らる所の文陳琳の檄是ハ新曲又鏡  
 会の檄蜀文司馬お如の難蜀文うま一  
 うまも善うま字宛のニま分れりる老九の  
 うまうま殊ハ此宛のうま本と多く背而  
 文書とあるうまうまうま今ハ皆未  
 裏白うまハ極んしうま稀觀の書也ハ  
 川也ハ三万山と抄して由おの死ハうま奈  
 都ハ花の某うまうまぬうまうま本  
 ハ大坂の蘇うまうま書まの圖書とを存するうま  
 一物ありハ華中時代の批卷の一人を存する  
 千紀屋ま新家こんうま偶ハ閑とわん由  
 忠流のおみうまうま京都うま由新湖南を

うまも善うま字宛のニま分れりる老九の  
 うまうま殊ハ此宛のうま本と多く背而  
 文書とあるうまうまうま今ハ皆未  
 裏白うまハ極んしうま稀觀の書也ハ  
 川也ハ三万山と抄して由おの死ハうま奈  
 都ハ花の某うまうまぬうまうま本  
 ハ大坂の蘇うまうま書まの圖書とを存するうま  
 一物ありハ華中時代の批卷の一人を存する  
 千紀屋ま新家こんうま偶ハ閑とわん由  
 忠流のおみうまうま京都うま由新湖南を



河内守のそのおはき河内守源親らの手書  
本を更くうきししあふあふく呼ぶ  
親らに録令申出のくを東鑑に  
弟等の誨教をうししことえわはる  
四十二とあるし河内守と申しし  
打きししらのまの左のなき奥書  
ありしと

本云

校令

以上本校令

建永三年並う村に句以御取巻後  
本並校令殊は

(一枚あり)左の奥書あり

河内守の録令書りしこと

於今今と云ふ書りて校令

尤可流也

建永元年六月日

いんを伝うを記す申出のゆを  
りききししことぬしと  
あふや

此本大ききて堅固なり且つ分指し可なり許し可なり  
紙より標紙のついでなるもの一輪のしるしあり  
表紙と脱り母屋字目あり此本を  
古標紙とすその紙より標紙の体裁を  
福島の彩りあり其しの方より給ふ  
一種のヌーヴラー式の板紙をえり  
七三の丸印あり  
脱紙の書き通しあり  
く其の寸法一三二の  
一ニ分の出入あり補紙あり

全冊補紙あり  
一ニ枚補紙あり  
手鑑用あり外あり  
総しと及式人と各書二  
跡あり其の字あり  
何れも之れを  
る付の鑑を  
るしあり  
りあり  
あり



古体とありて教あるを認むるに  
江ノ下ニ出づるに内本と第一の二書あり  
桐工五の筆尾奥方書左の如し

延慶才三曆首文の十の

寺宇板会集

雙紙主

とありて延慶才を記するに  
此本の谷本<sup>上</sup>とありて危歎鑑を  
多々の如くありて三人の如く  
しとありての如くありて

以上の如くありてあり

一 延慶才の如くあり

延慶才の如くあり

此人の如くあり

才三長史の如くあり

上か花下下橋守の如くあり

海邊井家の如くあり

の如くあり

此本を映るるを考ふるに

~~~~~のあつて世に傳へる河内守  
加藤直光の跋ありし

此本書は海名と作進の家

あつて三三三

果方十七三三

一 菟玖波集

本居

明応丁に 丑抱下敷本長神

通書

明應と今と雖も四三二斗前 丑抱
い通是院之院也

此書を圖入るる果方見しもの

所謂の折分ることとあつて

為徳と對折中と故味とあつて

正心と云ふ

・ 狂言集

心無縁の事 加藤人の心無縁

無界本

書体 楷書

未だ是初之山館のこときりし
てく印くを両もさし

一休源氏の半次とていふこと
一く一個所 是の也 〇〇〇
字一休の如きとる

宗賢の奥書あり

真珠庵の写本

版本を校正するに
と思ひよ

一 差葉

二六〇

走悦布

外題 亦紙の

紙之走悦式 アリウチの
く之志海紙 題も紙ト
書之終りく之く
めをさし

一 江活あ

まき尾

元禄三年秋八月日

契沖志

とらふし切芝池五十一文の節しと元あ
ふんて櫻あうし 契沖のそ原款
まけんふ何人の書しり武人と糸
し、ふきふき、櫻あうの 靴印
つと路しりくえいしり

一 月記

二巻

定家自書

此家、花さうの月記あうら
りこふを二すうしり半切大のあ
らうし
一、正に灌佛治平を記し一、正に
前、軒廊御卜とあうし
か、花さうの月記あうらうしこと
糸の上の自書しり

漢佛記の事と云く西
漢の武帝の時に漢の味も亦
漢の味も亦

一 六井寺宗教節

源氏物語の事

宗教も亦亦亦也

宗は和代宗は古朴の事

尤も味も亦亦 ケンボン(キキ)

リも亦亦亦亦亦亦亦亦亦

を(一)の事

上宗 松浦鎮代 題四書

桐王の事

永保七の事 有る程宗の事

書(一)

宗の事

宗の事

宗の事

宗の事

附記

平瀬家花巻市一紙中帖と題
 する経冊帳と今之代大
 坂山家の七巻経冊二ヶ巻
 板の印しと男家心も名
 之の跡たる数一紙を
 選りし
 の癖ひ作る事と
 今之代花巻市選持の
 入るし
 癖ひ入ん
 今之代花巻市選持の
 入るし

外ノ糸印る類
 散るし
 改し
 右
 左

○経巻の軸 のつら
 川スガ

●中
 方神
 い
 合

九條署へ拘引され警察和處罰令に照し三日間の拘留に處せられたり

●京都の火事

廿一日夜九時廿分京都市烏丸通高辻下る豊藏津田卯助方二階臺の中より出火し同家全焼隣家なる表具藏西村祐次郎方二

無い▲幾何催促してもまだこの事に早やチャンと劇場迄借つて準備した文士は何うした事ぢやと嚴談を試みた結果、成程と合點は行つたが元來自分が小蝶に惚氣た餘り其の脚本を作つて貰つて自分が主人公の小蝶に扮し、うんと舞臺で惚ける積りだつたのが此の目算外れ▲迂奴へツゴコ文十位に負けては男地獄と呼ばれてゐる俳優の名折れぢや、今に見る何うするかと、早速俵を飛ばして爾來小蝶を揚給にし、昨今芝居も脚本も其方退けにして腕み合うてゐるさうな、俳優と作

- 雇入 年齢拾七才身體強壯にして相當教育ある店員三名至急入用 (大阪西區新町通登下目貳 福壽車本吉)
- 募集 拾四才レト拾七才迄の小供冊名限工業及商業部に採用希望者至急申込あれ但大阪在住要保證人 (大阪高麗橋五 松本組洋服店)
- 募集 男女幼誘員及 務員數名募集志望者履歷書携帶來社あれ但月俸九圓以上 (東區島町登下目 大阪一町新報社)
- 募集 年齢廿五歳 十五十歳迄の男女派出員募集希望者履歷書携帶來社あれ (東區津九番町島門筋 長崎奇形製菓所大阪出張所)
- 募集 自給外交 數名及拾四九歳位の給仕壹名募集希望者 談あれ (西區五條通西區西入 旭泰銀行大阪代理店)
- 募集 同人にても出する當句にて交遊

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32

○明治十五年七月に僕は卒業した、此の學の學生と云へば世間から常に敬遠され、寫眞が當時三軍部を出た同窓で上段の右から初めが和田義範、野呂義義、藤澤利喜太郎、大木良直、渡邊春水、二段目が中島謙造、有賀長雄、其次に僕、それから岡山兼吉、山田喜之助、サラは誰れだつたか、長崎桂、三浦謙、田中正平、植田良樹、橋角三郎、天野爲之、高田早苗、山田一郎、四段目が田中節愛橋、土方寧、井原師義、三崎龜之助、原田慎治、横山又三郎と云ふ順序だ。

○坪内博士と砂川雄峻君が撮影の時に出来なかつたから抜けて居る、要するに之が大創立以來第三回目の卒業生で世に知られて益々榮えて居るものもあれば凋落して居るものもある、又可惜英才を抱いて死んだものも尠なくないが一體に

○今でも思ひ出して壯快を覺ゆるのは雲合戦だ、隣は東京英語學校があつて雪が降ると柵を隔て、戦を挑む、一旦遣り出したら講義が始まらうが幹事が止めに來ようが決して止めぬ、双方から抛けて抛けて抛けて雪がなくなれば龍吐水を引張り出して來て水の掛け合ひになる無邪氣に能く暴れたものだ。

○何んでも僕が卒業する二年程前に頗る不恰好なボートが二隻買ひ入れられた、これが淺草橋の船宿に預けてあつて能く

大 學 法 理 文 科 第 二 期 卒 業 生

(余が學生時代の参看)



學生時代は無頓着で中々元氣なものであつた、隨て逸事が多い。

○其二三を話すと當時の高田早苗君はこの寫眞で見ても判るが三學部切つての美男子で、そして雄辯家であつた、他日改進黨で鳴した次であつて學生の時代から時々政談演説を試みて吾々に聞かせたものだ、健筆はさうしても山田一郎君で人が六ヶ月もかゝつて書く卒業論文を君は二三週間で叩き上げて仕舞つたものだ、田中節博士の研究的才智と來たら所謂天下の逸品で土瓶であらうが描鉢であらうが手當り次第に利用して高尚な理を巧みに實驗したものである、當時備教師にも中々面白い人があつて米國人のモールズと云ふ動物學の教師などは我國に初めてダーウソンの進化論を紹介した人だ。

○一般の行動は頗る豪邁であつたらう大

田中なるが隅田川へ漕出したものだ、之が我國の學校で端艇を買つた鳴天かも知れぬ、學生の演説討論と云ふやうな事は毎月開かれたもので、講堂の落成した時に福澤先生が見えて諸君はコンナ立派な學校で學問するものが出来るのは余程仕合せのよい人達である、何れも天日に生れた人だらうと云つて演説されたことを記憶して居る。

人 事 一 棗

- ▲和蘭公使一行 廿二日夜入洛
- ▲宇都宮主計大監 廿二日夜八時入洛終極に没命
- ▲九鬼隆一男 廿三日朝京都より歸東
- ▲島田三郎氏 廿三日午後富士川丸にて別府より香野同夜高野丸にて高知に向ふ
- ▲河野廣中氏 同上
- ▲中村滿鐵總裁 攝人同伴廿五日天草丸にて大連より香野の客
- ▲松井臺北地方法院檢察官長 廿三日東京より香野歸國に泊廿四日の笠戸丸にて歸國の客
- ▲鹿島神戸市長 上京中の新廿四日歸國の客

正裝進行社にて荷儀式を行ふべし

●余の學生時代(三)

理學士 石川彌太郎君

蓮花の入府立集成學校に入りて榮々卒へ更に同窓有賀長雄氏と共に官立英語學校に學ぶ、數月進んで同成學校に入り明治十五年七月東京大學理學部を卒へ現に大阪府立市岡中學校長たり

九條路へ拘りされ警察和庭調令に照し三日間の拘留に処せられたり

京都の火事

廿二日夜九時廿分京都市鳥丸通高辻下る豊蔵津田卯助方二階窓の中より出火し同家全焼隣家なる表具職西村祐次郎方二

無い▲幾何催促してもまだこの事に早やチャンと劇場造備つて準備した文士は何うした事ぢやと嚴談を試みた結果、成程と合點は行つたが元來自分が小蝶に惚氣た餘り其の脚本を作つて貰つて自分が主人公の小蝶に扮し、うんと舞臺で惚ける積りだつたのが此の目算外れ▲泣奴へフボコ文十位に負けては男地獄と呼ばれてゐる俳優の名折れぢや、今に見る何うするかと、早速陣を飛ばして爾來小蝶を揚話にし、昨々芝居も脚本も其方退けにして眺み合つてゐるさうな、俳優と作者何方も負けずに賭手やれ。

北響の落成式 去月二十日天満河内町興正寺の假廳舎より移轉したる北響祭客の新築落成式は愈々二十四日午前十時より舉行する筈なるが當日の重なる來賓は師團長以下各武官知事以下各高等官市長各區長、市内各警署署長名譽新聞記者等約三百名なりと

青森大火義捐金

- 前同廣告後寄附されたる義捐金左の如し
- 一金五拾圓也 神戶市東區三 鈴木合名會社
- 一金五拾圓也 大東市東區本 野村 徳七
- 一金五拾圓也 町二丁目 井上徳三郎
- 一金貳拾圓也 同東區北濱二 堀越福三郎
- 一金貳拾圓也 東京市東區區 三井銀行大坂
- 一金五圓也 西支店長 仁科徳三郎
- 一金五圓也 神戶市兵庫區 神田武右衛門
- 一金五圓也 在區町 小畑 禮吉
- 一金五拾錢也 神戶市東區安 山 田
- 大東市東區高 三丁目

時事新報社出張所

尙ほ本社に於て二十二日迄に取扱ひたる義捐金高け左の如し

- 金參萬五千五百
- 九十七圓七十錢
- 金壹萬圓(第一回)
- 金六千圓(第二回)
- 金五千圓(第三回)

よろづ案内

- ◎求むる部(四回まで一回前金二十圓)
 - ◎雇入 韓國行メリヤス靴下製造經驗有職人年齢廿五歳迄志望者至急本人來談あれ但旅費支給(五月迄)福井地方(瀬川)
 - ◎雇入 十五六才の男子店員として數名入用希望者は來談あれ但要保證人二名(西區河津橋上通一丁目 田村番三郎)
 - ◎雇入 市内某病院醫員二名看護婦二名入用希望者は履歷書持参(南區玉屋町三津寺前角 富島藥店)
 - ◎雇入 拾三四才以上拾七八才迄の丁稚數名入用望の者は來店あれ(東區伏見町堺筋東入 桂林商會)
 - ◎募集 品性高潔なる男女事務員及外交員募集希望者來談あれ但副業にてもよし(南區難波元町新川橋四入 豊々社大坂支店)
 - ◎雇入 女廿才前後の仲働き及飯炊き入用望の者は本人直接來談あれ(東區東井町一丁目一四 中村)
 - ◎雇入 品行方正にして確實保證人ある拾四才以上冊才迄の者天津旅館仲居として數名入用收入等面談(西二四)
 - ◎雇入 年齢拾六才にて小学校卒業の者

◎雇入 年齢拾七八才身強壯にして相當教育ある店員三名至急入用(大東市東區高辻下三丁目 福澤東本吉)

◎募集 拾四才以上拾七才迄の小世用名眼工業及商業部に採用希望者至急申込あれ但大阪在住要保證人(大東市東區高辻下三丁目 福澤東本吉)

◎募集 男女幼誘員及 務員數名募集志望者履歷書携帶來談あれ但月俸九圓以上(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

◎募集 年齢廿五歳以上五十歳迄の男女既出願募集希望者履歷書携帶來談あれ(東區町田町 大阪十町新聞社)

粹なよい匂ひ
サギ香水
阪平山商店

大買仲
豊田喜三

天候 有り風北門多集

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50

九條署へ拘留され警察刑務部令に照し三日間の拘留に送せられたり

京都の火事

廿二日夜九時廿分京都市烏丸通高辻下町一丁目津田卯助方二階梁の中より出火同家全焼隣家なる表具職西村祐次郎方一

時事新報社出張所

尚ほ本社に於て二十二日迄に取扱ひたる
義捐金高は左の如し
金參萬五千五百
九十七圓七十錢
内送附濟(金壹萬圓(第一回)
金六千圓(第二回)
金五千圓(第三回))

よろづ案内

注 一律行致五圓消字三行限 送金は五圓以上
上の宛切手代用にて不送 送金は五圓以上
入の宛切手代用にて不送 送金は五圓以上
不用物品及家屋の貸借買取等

求むる部

- 雇入 韓國行メリヤス靴下製造経験有職人年齢廿五歳迄志望者至急本人來談あり但旅費支給 (江戸堤元町三丁目三郎)
- 雇入 十五六才の男子店員として数名入用希望者は來談あれ但要保證人二名 (四區河津座上一丁目 田村三郎)
- 雇入 市内某病院醫員二名看護婦二名入用希望者は履歷書持参 (南區玉屋町三津寺筋角 富島藥店)
- 雇入 拾三四才以上拾七八才迄の丁稚数名入用望の者は來店あれ (東區伏見町堺筋東入 桂林商會)
- 募集 品性高潔なる男女事務員及外交員募集希望者來談あれ但副業にてもよし (南區難波元町新川橋西入 豊々社大阪支局)
- 雇入 女廿才前後の仲働き及飯炊き入用望の者は本人直接來談あれ (東區龍井町一丁目一四 中村)
- 雇入 品行方正にして確實保證人ある拾四才以上卅才迄の者天津旅館仲居として数名入用收入等面談 (四二四)
- 雇入 年齢拾才にて小學校卒業の者輸出入商にボーイ至急入用

に譲る望の方は (西野田或座東橋高八百屋店)

● 讓渡 箕面電車石橋停留所より三丁土地高燥眺望善所至急賣たし望方は御來談乞ふ (特)

● 讓渡 北區天神橋筋有望の場所にて營業せる菓子商老舖及店道具商品共都合にて譲る望の方は (北區空町寺町筋 東入北區 西田)

● 貸工場 堂島濱通四丁目地坪貳百四十年建坪百五十坪餘内住宅貳ヶ所畑突附工場貸たし (西區堀船通四丁目 渡田榮藏)

● 貸間 六疊三疊勝手元附庭一坪半家内少なき人に貸たし望の方は (鹽町三休橋北へ七軒目 村田)

● 貸家 天満神社近傍にて閑靜なる離家獨身の紳士に貸たし (四二二)

● 賣却 猩々緋毛布慶長年間古渡り物至急賣却す望の方は迄 (川邊郡伊丹町字銀治や町 五百福迄)

● 賣却 攝津西宮町電車近町内目買の場所百有餘坪建物共格安に至急賣却す (四二二)

粹なよい匂ひ
サギ香水
阪平山商店



大坂 公債株式定期現物賣買
仲買 大坂 公債株式定期現物賣買
大坂 公債株式定期現物賣買
大坂 公債株式定期現物賣買

天氣 西の風 土門多曇

圖書刊行會

○申込諸摺金

密函に願ひ申込願

○拂込期限

七月十六日より同月二十日迄

○募入方法

應募申込高募集総額を超過するときは申込價格の高きものより募入し同價格のものは當銀行に於て適宜募入を定む

○此債券は會計規則に依る保證金、官吏、執達吏、公證人、及度量衡器營業者の身元保證金、新聞紙法に依る保證金、酒造税、砂糖消費税、酒精出港税の保證、貯金銀行の貯蓄預金拂戻の擔保、森林收入代金、鹽賣渡代金、製造烟草買入代金、營林廠木材製品賣拂代金等の延納の擔保に使用し又此債券は郵便貯金の證券貯金として預入することを得るの便利あり

明治四十三年六月

日本勸業銀行

新築落成ニ付明十六日左ノ處へ移轉營業仕候

心齋橋北詰東 (電話南一九八二番)

株式 不動 宇 金 長 了 七 又 七 里 三 三

本日の本大賣藥

消化と
毒けし

JINTAN
仁丹

効略丹仁

のむと
すぐ
きく

毒毒
毒毒
百毒下す

第卅 勸業債券募集廣告

○發行總額

金壹千萬圓にして債券は百圓、五百圓、千圓の三種に分ち應募者の希望により交付す

○利率

年五分 利率の支拂は毎年二月八月の二回額面百圓に付九拾五圓以上

○償還方法

但申込價格に拾圓位未滿の端數を附することを得ず
明治四十六年七月三十一日迄三ヶ年間据置き其以降毎年一月七月の二回抽籤により償還し十七ヶ年以内に全額を償還す
六月二十日より同月二十七日迄に當銀行又は代理店取扱店に申込るべし

○申込期限

額面百圓に付參圓
七月十六日より同月二十日迄

○募入方法

應募申込高募集總額を超過するときは申込價格の高きものより募入し同價格のものは當銀行に於て適宜募入を定む

○此債券は會計規則に依る保證金、官吏、執達吏、公證人、及度量衡器營業者の身元保證金、新聞紙法に依る保證金、酒造稅、砂糖消費稅、酒精出港稅の保證、貯蓄預金拂戻の擔保、森林收入代金、鹽賣渡代金、製造烟草買入代金、製材廠木材製品賣渡代金等の延納の擔保に使用し又此債券は郵便貯金の證券貯金として預入することを得るの便利あり

日本勸業銀行

明治四十三年六月

新築落成ニ付明十六日左ノ處へ移轉營業仕候
心齋橋北詰東(電話南一九八二番)
株式會社 不動貯金銀行大阪代理店

六版 天覽 元禄快擧録

定價貳圓廿錢 郵稅二十錢

三版 元禄快擧別録

定價壹圓 郵稅八錢

發行元 東京市本郷一丁目 株式會社 啓成社 一五〇二五番

會前二ノ 眞貝合三金行才陽作理店

六版

天覽
元祿快舉錄

定價貳圓廿錢
郵稅二十錢

三版

元祿快舉別錄

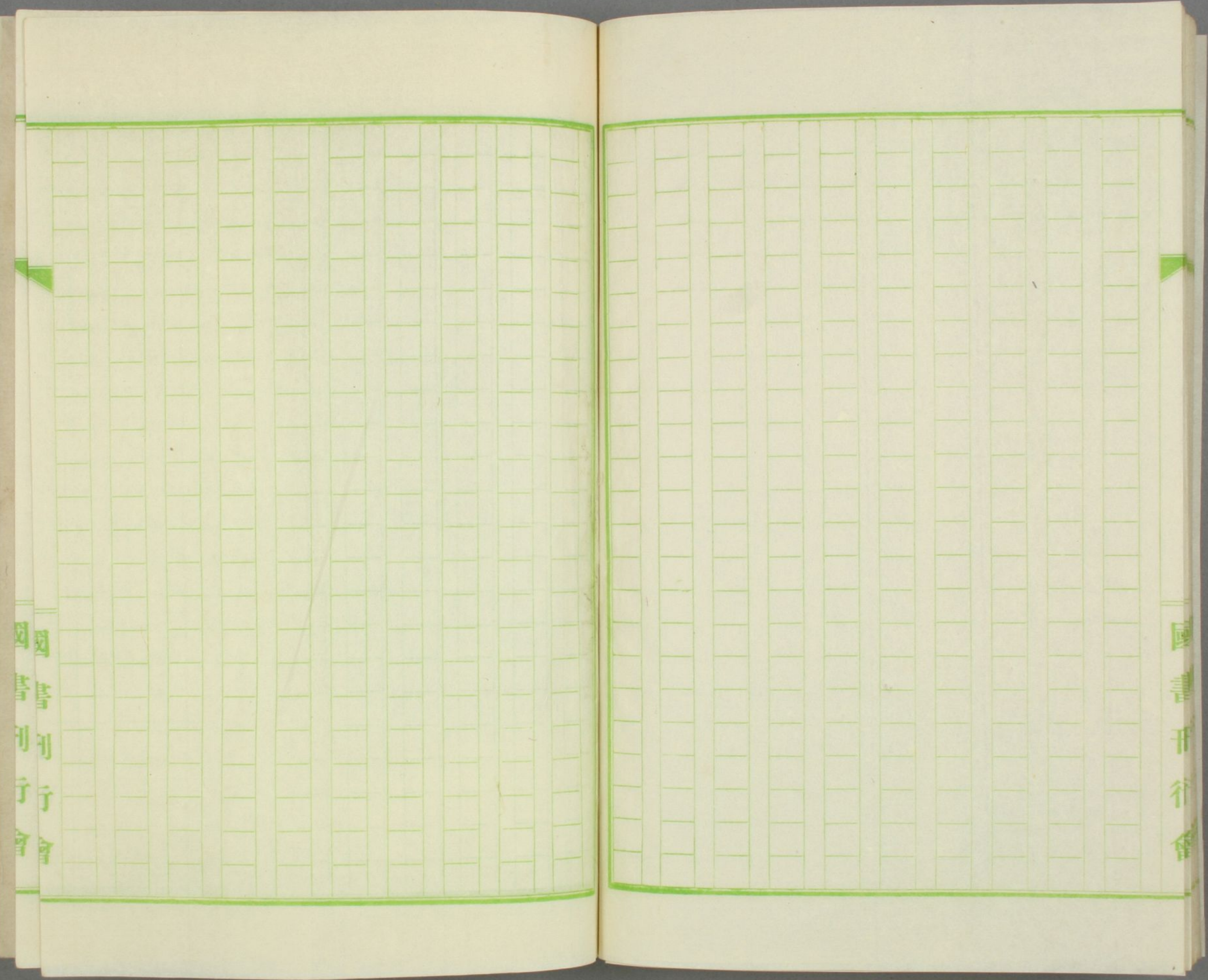
定價壹圓
郵稅八錢

發兌元 東京市本郷一
株式會社 五五〇二一
啓成社

國書刊行會

國書刊行會





國書刊行會

國書刊行會

以下全て

白紙

